

---

# 銀の刃が光る時

爽龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の刃が光る時

### 【Nコード】

N0680L

### 【作者名】

爽龍

### 【あらすじ】

ここは幕末の江戸、かぶき町。侍の国と呼ばれたこの地も、今では天人の支配を受けてしまっている。そんな天人達の勢力を排除しようとして、攘夷戦争が勃発。この町に万事屋を構えているこの物語主人公、坂田銀時もその戦争に参加した一人で、“白夜叉”の異名を轟かせた男だった。

ある時、銀時の元に小包と白夜叉宛ての脅迫状が届く。それは銀時のかつての盟友で穩健派攘夷志士の、桂小太郎の元にも届いていた。

そして陰で怪しい動きをする過激派攘夷志士、高杉晋助。高杉と行動を共にし、今回の鍵を握る男、勝川舟。果たして江戸に近づくと暗雲から、銀時は大切なものを護ることが出来るのか！？

第零訓の一部を修正いたしました

## 第零訓 夜中のトイレは何か出そうで怖い

日本の中心部の大都市、江戸。

二十年程前、地球へと進出してきた天人の勢力を追い出そうと侍達が日本各地で立ち上がった。

かの攘夷戦争である。

中でも江戸は侍達の活動が特に活発であったが、やはり人斬り包丁では最新機器の力には敵わず、結果は天人の圧勝。虚しくも人間が天人に平伏す形となってしまった。

しかし、そのような状況においても、この街の本質が変わることはない。昼間は街の大通りが大勢の人で賑わい、日が沈み、辺りが暗くなればネオンの明かりが灯り、街は夜の表情を現す。

そう、それは丁度満月を迎えた月の光が、異様なまでに紅い日のことだった。

その男は夜の店が立ち並ぶ通りの真ん中を歩いている。しかし、彼の目がそれらに向けられることはない。いや、彼の目はサングラスに覆われており、完全に向けられていないとは限らないが、彼の顔はただ正面だけを向いていた。

通りの真ん中を歩いているにも関わらず、客引きがどんなに呼び止めようがどの店にも入ることのないその様子は、その場においてはあまりにも不自然で、周りの目を引いた。

そもそも、彼のその風貌がまず人々の注目を浴びていたことが余計に作用した。

長いコートにサングラス、背中に三味線を携えて周辺からの視線を気にも止めずに歩いていく。極めつけは外に音が漏れるほどの大音量で音楽を流し続けるヘッドホン。客引きを一瞥すらしなかったのは、どうやら音楽が邪魔して聞こえなかったためらしい。

不自然な格好をして不自然な行動をとるその男は、結局一軒にも入らないまま角を曲がった。

ようやく男が足を止めると、そこには幕府の要人御用達の料亭があった。男は迷うことなくそこへ入ると一度歩みを止め、中にいた従業員と幾ばくか言葉を交わすと、再び歩き出して料亭の一番奥にある部屋の襖をガラリと開けた。その部屋の中には黒く長い髪を綺麗に一つに結い上げた堅い雰囲気の男が杯に酒を注いでおり、いきなりの訪問者に、少なからず驚いているようだった。しばらくの沈黙が二人を包む。先に口を開いたのは訪問者の方だった。

「勝川舟殿とお見受けするでござる。」

「そうですが あなたは？」

「拙者、河上万斎と申す。勝殿がこの国を変えるために反乱を起こそうとしていると聞き入れ、参った次第でござる。」

「…幕府の方ならお帰り頂こう。」

「いや、拙者はただの反乱に協力しようとしてここへ来た、一攘夷浪士でござるよ。」

「…………。口だけでは信用しかねます。本当にそうならば、明日の丑三つ時にここでお会いいたしましょう。」

その言葉を聞き、万音は微かな笑みを浮かべた。

その夜の月は怪しげな紅い光を雲の隙間から放っていた。

その月明かりの下である男が一人、三味線を鳴らしている。

「クク…そろそろおっ始めるぜ だけえ祭をよオ……」

男…高杉晋助は口元を歪ませながら、小さな笑い声を漏らす。高杉の目の先には中央にネオンが目立つターミナルを刺したかぶき町が広がっていた。

## 第一訓 大きな雲にはラピュタがある気がする

ここは江戸の中心の町、かぶき町。新八はいつもの様に階段を上がり、引き戸を開ける。

「おはようございまーす って起きてる訳ないよな…。」

ため息混じりに呟いて、戸を閉めた。ここ、『万事屋銀ちゃん』は、かぶき町四天王の一人、お登勢が経営している『スナックお登勢』の2階にある。新八は押し入れを開き、中で寝ている少女に声をかけた。

「神楽ちゃん、もう朝だよ！」

「うーん…もう食べられないアルー…。」

「まったく、夢の中でも何か食べてるよ。ちよつと神楽ちゃん！いい加減起きないと」

「まだ食えって言うアルか 仕方ないアルな…。」

ガブツ！

「ギヤアアアア！！」

神楽は新八の腕を何だと思っているのか、思いきり噛み付いてきた。そして、新八の断末魔にも似た悲鳴に、やっと目を覚ました。

「何アルか新八ィ。少しは静かにしてられねーのかヨ。」

「テメエのせいだろーがアアア!!!」

噛まれた腕から血を流しながら、新八はシャウトした。新八のシャウトに、ようやく目を覚ましたらしい一応この万事屋の主人である銀時が、のそのそと隣の部屋から出てきた。

「んだよ、うるせーな」。新八つつあんよオ、少しは静かなツツ  
「コミとか出来ねーの？」

「あ、銀さんおはようございます。って、何で朝からうるさいうるさい言われなきゃいけないんですか!?元はといえばアンタらがさつさと起きないからいけないんでしょーが!!!」

「はいはい。ったく、朝から怒鳴りやがって。どこのお母さんですかコノヤロー」

気だるげに舌打ちして、銀時は奥に引っ込んだ。銀時の態度にただでさえムカついていた新八に追い打ちをかけるように神楽が言った。

「オイ、ダメガネ、早く朝メシの用意しろヨ。あと定春のエサ。」

そう言い捨てて、ふいっとトイレに行ってしまう。

「ふざけんなアアア!!!」

新八は肩をわなわなと震わせて、悲痛な叫びを上げた。が、しかし、その声は途中で定春に頭を喰われたせいでかき消された。

万事屋のいつも通りの日常、いつも通りの平穏な空気だった。誰もがいいつも通りに一日が過ぎていくと思っていた。

この時までには……

## 第二訓 テストがある時はどうしても現実逃避に走る

単なるツツコミの新八が、DS男と毒舌娘に勝てる訳もなく、結局朝食を作る羽目になった。新八が出来上がった朝食を並べ、他の二人が席についたが、神楽はすぐに立ち上がって新八の前にズカズカと歩いていった。

「オイ、醤油がねーぞコルア。」

神楽は妙なグラスンをかけて新八の胸ぐらを掴み、凄んでいる。新八も頭に青筋を立てて応戦する。

「醤油の一本や二本、自分で取れやアアア!!!」

「テメエらうるせーよ。飯ん時ぐらい黙ってる。」

銀時はやる気なさげな様子で二人に注意する。だが、そんな注意で黙る奴らではない。

「つべこべ言ってるねーでさっさと醤油よこせヨオオオ!!! どうせ醤油取るくらいしか能がないダメガネのくせに!!!」

「んだとゴルアア!!! 僕を何だと思ってるんだアア!!!」

「うるせーんだよテメエらアア!!! たかが醤油で喧嘩すんじやねえよ!!! ついでに塩がねえぞオオオ!!!」

「アンタもかいいيي!!!」

「うるせーんだヨ！！天パは黙って母ちゃんの乳でもしゃぶってな！！それ以上口開くなら塩ばらまくぞコルア！！！！」

「塩あんじゃねえかアアア！！！！」

とうとう銀時もキレて、三つ巴の戦いが始まるかという時だった。

ピンポン

突然インターホンが鳴り響く。それを聞いた機嫌の悪い三人は、そろって同じ想像をし、そろって同じ行動をとった。

「家賃ならねえって言うてんだろーがアアア！！！！」

バキイイイ！！

三人は玄関のドアに飛び蹴りをくり出した。ボコボコにしてやろうと、外れたドアの下敷きになっている人影に近づき、その顔を覗き込む。すると…

「アレ？誰？これ。」

そこに倒れていたのは荷物を届けに来た、ただの飛脚だった。

「申し訳無いことしちゃったな あっ、何か小包が届いたみたいですよ。ほら。」

冷静さを取り戻した新八が、白目をむいて気絶している飛脚の腕を指さした。確かに小さな箱が抱かれている。

「あつ、銀ちゃん宛てアルよ」

神楽は飛脚の腕から小包をもぎ取って銀時に差し出した。銀時は神楽から受け取った箱を見て、眉をひそめた。宛先は確かに自分の名前が書かれているが、差出人の名前も住所も書かれていない。

「何だこれ 誰から来たのかわかんねーじゃねーか。」

「何かあやしいアルな！きつと爆弾が入ってる箱ネ！開けてみるヨロシ！」

「いや、普通爆弾入ってる箱開けないから！」不審な箱を開けようとする神楽にツツコんだ新八は、銀時を振り返った。

「絶対怪しいですよ、そんなの。警察に届けた方が」

バリバリッ！

「オイイイイ！！！！言ってるそばから何やってるんですか銀さんっ！！！！」

何のためらいもなく、銀時はガムテープをはがして、箱を開けた。中に入っていたのは…

「銀ちゃん、これ、何アルか？」

「教科書、かな？」

薄汚れた古い本に、新八と神楽は首をかしげる。しかし、銀時の反応は違った。目を大きく見開いて、驚きを隠せない様子だった。本

を持つ手が小さく震えている。

「銀さん？」

「どうしたアルか、銀ちゃん？」

パサッ

本の間から二つに折りたたまれた紙が落ちた。銀時は素早くそれを拾い上げ、読み始める。

「銀ちゃん、それ何て書いてあるアルか？」

「……。」

返事がない。銀時の意識は完全に手紙に集中していた。もう普通の死んだ魚のような目ではなく、視線を下へとずらしていく度に、その瞳は鋭さを増していった。表情は強張り、紙を握る手には力がこもっている。

ただならぬ銀時の様子に新八と神楽は何も言えなかった。読み終えた銀時は、ギリツと奥歯を噛み締めて、紙をグシャツと握り潰した。

「新八、神楽、俺ちよつと出かけてくるわ。」

「えっ、銀ちゃん!？」

「銀さんどこ行くんですか!？」

「急な仕事の依頼だよ。じゃあな、悪イけど定春の散歩頼む。」

銀時は階段に向かって歩き出す。

ドクン

銀時の後ろ姿を見ていた新八は、不意に嫌な予感がした。

「銀さんっ!」

思わず銀時を呼び止める。

「あ?」

「仕事の依頼なら、僕も一緒に行きます!」

「私も行くアル!」

神楽も新八と同じ胸騒ぎを感じたのか、不安げな顔で叫んでいる。

銀時は一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐにため息をついた。

「何? 銀さん一人じゃ行かせられないってか? オイオイ、俺を何だと思ってるんだよ。平気だよ! 俺一人で十分だ。」

フツと笑って銀時は階段を降りてしまう。やはり引き止めることは出来ないらしい。

「ぎっ、銀さん!」

「何だよしつけーな。」

面倒くさそうに振り返った銀時に、新八は必死に言葉を探した。

「あつ、あの…すぐに帰って来てくださいよ？」

「ちよつと気持ち悪いよ、新八君。大丈夫だつつつてんだろ？つたく、何がそんなに心配なんだよ。」

何故だか目を離してはいけないような気がして、ブツブツ言いながら歩いていく銀時の背中を、新八はずつと見つめていた。

原チャリに乗った銀時の姿が曲がり角に消えた後、神楽が新八を見上げて言った。

「新ハイ、ちゃんと銀ちゃん帰って来る？」

「え？」

「何だか嫌な予感がしたヨ。もう、銀ちゃんが戻って来ないって。」

「やっぱり、神楽ちゃんも感じていたのか…」

「大丈夫！銀さんは絶対帰って来るよ！だって銀さんだよ？神楽ちゃんってば、銀さんを何だと思ってるの？」

新八は半ば自分に言い聞かせるように言った。神楽はそれを聞いて、嬉しそうに笑う。

「そつアルな！！銀ちゃんなら大丈夫アル！！」

大丈夫

銀さんが帰って来ないなんて絶対にありえない。なのに、この消え

ない胸騒ぎは何だろう？

この押し潰されそうな不安は何だろう？新八の気持ちを察したのかそうではないのか、神楽はポケットから一枚のポスターを取り出した。

「来週、かぶき町で祭があるネ！銀ちゃんが帰ってきたら三人で行くアル！」

満面の笑みでポスターを広げる神楽を見て、新八の不安は一気に消し飛んだ。

「うん！そうだね！」

銀さん、早く帰って来ないかな。そんなことを呑気に考えた。

まだ新八も神楽も知らなかったのだ。

この祭が、恐ろしい計画の幕開けになることを…。

### 第三訓 ペットボトルのふたはたまに開けづらい

銀時は怒りに震えていた。送られてきた匿名の手紙を思い出す。

『白夜叉に告ぐ。この国での貴様の溶け込み様は目に余るものがある。そこで、我々は祭を開催しようと思う。貴様がこの国にされたことを思い出せ。この国を変えるためにも良いだろう。貴様も参加せよ。さもなければ大切なものが消えることになる。』

大切なものが消えることになる…  
原チャリのハンドルを握る手に力が入る。

「これ以上失う訳にはいかねえんだよ…！」

苦しげな呟きを漏らす。

これを防ぐためにはアイツの所に行くしかねえ！！銀時は原チャリのスピードを上げた。砂埃が舞う。

この時…

銀時の頭は怒りに染まっていた。そのせいで気がつかなかったのだ。銀時…いや、白夜叉宛ての手紙を落としてしまったことに。そして、偶然にも、それを拾ってしまった人物が

「ありや万事屋の旦那じゃねーかい。あんなに急いでどこ行くんだ？ん？」

沖田は自分の足元に落ちていた紙を拾い上げた。

「グシャグシャじゃあねえかい。お、何か書いてあんな。」

そして、沖田は読んでしまった。いつもはポーカーフェイスの沖田の顔に驚愕の色が浮かぶ。

「こりゃー、すげえモン拾っちまったなァ。とりあえず土方のバカに知らせねーと」

沖田は手紙をポケットにしまい、屯所へ走り出した。

その頃銀時は、ある男を探していた。彼の居そうな場所をくまなく調べる。宿屋、そば屋、路地裏、屋根の上。はたまたゴミ置き場まで。銀時はゴミ箱のふたを開けて、呼びかける。

「おーい、ツラア居るかぁ？居たら返事おぼっ！」

「ツラじゃない桂だっ！！大体誰がそんな場所に居るかアアア！！」

不意に殴られ振り返ると、握り拳を作り、青筋を立てた桂と

『テメエ、いくらなんでもそれはさすがに桂さんに失礼だろオオオ！！！！』

と書かれたプラカードを掲げたエリザベスが立っていた。

「エリザベスううう！！味方に回ってるようで実はお前が一番失礼なこと言ってるのだぞオオオ！！！！」

桂は『いくらなんでもそれはさすがに』の部分指さして怒鳴る。このままでは桂とエリザベスの言い合いが始まりそうだ。銀時はため息をついて話を切り出す。

「俺は生憎テメエらのケンカに付き合ってる暇はねえ。おいッラ、単刀直入に聞くけどよ、お前んとこに変な名無しの手紙とか届かなかったか？」

銀時の問いに、桂の顔がフツと真顔になった。

「ああ、来たぞ。“狂乱の貴公子”宛てにな。俺は世間的にも有名なだから、わざわざ何故昔の呼び名なんか使ったのか？まさかとは思ったが その様子じゃお前の所にも来たようだな。“白夜叉”宛てに。」

「ああ…今ここに あれ？」

銀時はそこでようやく自分がどこかへ落としてしまったことに気がついた。桂が驚きの表情を浮かべる。

「まさか、無くしてしまったのか!？」

「どっかに落として来ちまったみてーだな…」

怒りの余り、周りに気を配るのを忘れてしまっていたことに気が付いた。もしあれを誰かに拾われてしまったら いや、もしかしたらもう拾われてしまっているかもしれない。かぶき町の狭さを考えると…銀時はチツと小さく舌打ちした。銀時はしでかしたことの重大さに気付かされ、自分自身に怒りを覚えていた。桂は桂で手紙の行方を考えているのか、思案顔になって黙り込んでしまった。そんな二人を見兼ねたのが、エリザベスが桂の肩をつついた。

「とりあえず探しましょう。それに万が一見られていたとしても、今や“白夜叉”の名を覚えてる人間は数少ない。ここはかぶき町で

す。そんな奴、このかぶき町には桂さん以外考えられません。』

いや、そう言うお前も知ってるじゃねーか。銀時はツツコミたくなつたが、それよりも気になることがあった。確か以前、新八や神楽の前でさらつとだが桂がその呼び名を口にしたことがあった。神楽はともかく、新八がそれを覚えているかもしれない。もし覚えていて、あの手紙の話がアイツの耳に入ったら 銀時がそんな不安を抱いているとは知らず、桂は納得したように頷いた。

「ああ、探してみよう。このまま放っておいて、もしまずいことになつてしまつては守るものも守れん。お前は下で探せ。俺達は屋根に上つて上で探す。どこに真選組の輩がうるついているか分からないのでな。」

「いや、屋根に上つたからってバレない可能性高くないだろ。」

銀時がツツコミを入れたが、桂はおかまいなしに上つてしまった。ただつつ立っているだけの銀時に、振り返つて桂は言った。

「つべこべ言わずにお前もさっさと行け。銀時、もう俺達には守るべきものがたくさん出来てしまつたんだ。」

そして屋根づたいに走り去つていった。銀時は彼の姿が見えなくなるまで見つめていた。

『俺達には守るべきものがたくさん出来てしまつたんだ。』

振り返り様、桂が言った言葉が銀時の耳に響いた。

「守るべきものか…」

銀時はその言葉を噛み締めるように呟くと、原チャリにまたがり江戸の人混みへと走って行った。

#### 第四訓 小指を角にぶつけると痛い

「おーい！土方ア！出てこい馬鹿コノヤロー！！マヨネーズすることくらいしか出来ない副長気取りの無能税金泥棒が！！」

屯所に駆け込んで来るなり怒鳴る沖田の声を聞いて、土方は刀を振り上げながらドアを蹴破った。

「俺は正真正銘の真選組副長であつて税金泥棒じゃねエエエ！！！つーかそう言つちまつた時点でテメエも一税金泥棒なんだよオオオ！！それからマヨネーズ馬鹿にすんじゃねえ！！」

瞳孔開き気味の上司を（自分からぶっかけたにもかかわらず）さらりとかわし、沖田は平然と話しかけた。

「あ、土方さん、ちよいとこれを見てください。」

ひょうひょうとした沖田の態度にさらにムカついた土方だったが、沖田が差し出してきた紙の方が気になり、何も言わなかった。見ればグシャグシャにシワが寄り、砂で薄汚れていて、お世辞にもきれいとは言えない。

「総悟 これは何だ？」

「何って、見てのとおり手紙でさア。」

「いや、言われなきゃわかんねーよ！！」

沖田にツッコミつつ、土方はガサガサと手紙を開く。その文面を読

み進めるうちに、怒りの表情は消え、その表情は驚きに満ちたものに変わっていった。

「こりゃ脅迫状じゃねーか。それに…」

やはり土方も最初に出てくる名前に反応した。沖田は頷く。

「白夜叉 攘夷戦争であの桂小太郎や高杉晋助と共に戦ったと言われている奴でさア。ただ」

「その正体は不明で、今は生きているのかどうかすらわかっていない、謎の攘夷志士 だろ？」

突然の乱入に、土方と沖田は振り返る。

「近藤さん」

二カツと人の良さそうな笑顔で入ってきたのは、真選組局長の近藤勲。土方が手にしていた手紙を取り上げた。

「なんかすげえことが書いてあるが。総悟、良くこんなもん見つけたな。」

「ただの偶然ですけど。通りで万事屋の旦那を見かけたんで声をかけようとしたんですが、ありやかなり急いでたな。で旦那が立てた砂埃をはらおうと下を向いたらこれが落ちてたんでさア。」

沖田は近藤の手に握られた紙を指さした。

土方は“万事屋”というところに反応した。

「万事屋、だと？」

「何があったのかは知らねーが、すげえ勢いで原チャリ飛ばしてましたぜい。」

異様な土方の反応に、沖田は眉をひそめながらも先程の銀時の様子を語った。

「それになんとか緊迫した様子でしたねー。鬼の形相ってのはまさにああいう顔のことですア。」

それを聞いた土方は、しばらく何か考え込んでいた。近藤の顔にも疑問符が浮かぶ。

「どうしたんだトシ？万事屋がどうかしたのか？」

「なあ、総悟。その脅迫文、万事屋が通り過ぎる前から落ちてたのか？」

突然の質問に、沖田は少々面食らったが表情を変えずに言った。

「そんな俺が知る訳ねえでしょう。俺はスーパーヤサイ人じゃあねえし、千里眼も持ってませんぜ？俺アただの一警察官ですア。」

「誰もお前が超人だなんて言ってねーけどよ。ただ少し気になっただけよ。」

近藤は土方のその言葉で、彼が一体何を考えていたのかが分かった。

「トシ、お前 万事屋を疑っているのか？」

「……ああ」

土方は少しためてから答えた。

土方が万事屋の旦那を疑っている…？初め、沖田は土方は酒にでも酔っているか、もしくは寝ぼけているのだと思った。そんな沖田に気がついたのか、土方はため息をついた。

「根拠ならちゃんとある。万事屋は桂との関わりが何かある。」

「何でそんな風に断言できるんですか？」

「まずは俺達と万事屋が初めて会った池田屋の事件だ。否定はされたが、あれは絶対に何かある。普通の一般人だったらあんなところに居るはずがない。」

「単なる偶然じゃないのか？」

近藤も銀時が疑われることが腑に落ちないのか、不満そうな声を漏らす。

「まあ待て、近藤さん。まだ根拠はある。問題はあの紅桜を使った辻斬りが流行った時だ。攘夷志士同士の戦闘に、妙なガキを二人連れた、銀髪の馬鹿強い侍が混ざってたっていう話だ。そんな奴他に居ねえだろ。それに、その戦闘には桂だけでなく、あの高杉晋助が再編した鬼兵隊も関わってたらしいからな…。俺は必ず何かあると思ってる。」

正当と言えば正当だ。近藤も沖田も、何と云っていいのか言葉が見つからず、ただ黙ることしかできなかった。

銀時は、さつき通った道を何度も行ったり来たりした。

「くっそ ねえ……」

あれを誰かに見られてもしたら 銀時の握られた手が微かに震えた。

白夜叉 ……

そう呼ばれたのはいつ以来だろうか。その名前を思い起こすだけで、銀時の脳裏に焼き付けられた記憶が鮮明に甦ってくる。

武器を片手に自分を囲む天人達

その天人らを斬るために跳躍した時の視界

天人を斬った瞬間に浴びた血の生々しい感触

斬られた瞬間の天人の声にならない断末魔や、驚愕したまま硬直してしまった死に顔

転がる天人や他の仲間達の首や腕

全てを終えた後に残る苦しみや哀しみ、そして虚しさ

どれも本当は忘れてしまいたい、逃げてしまいたいような過去。けれど、“過去は変えられない”という現実が重く冷たく銀時に突き付けられる。

「帰るか……」

半ば諦めるような色の小さな声で、銀時は呟いた。

新八は部屋の中を行ったり来たりとろろろしていた。神楽の周りには空になった酢昆布の箱が山のように積まれている。もう銀時が出掛けてから5時間は経っていた。

銀さん、いくらなんでも遅すぎる。何かあったのかな？やっぱり付いて行けば良かったのかも…押し寄せてくる後悔に、新八は眉間にしわを寄せて目を固く閉じた。すると、階段を上ってくる足音が聞こえた。

「あつ、誰か来るアル！きつと銀ちゃんネ！」

先程まで、ただぼんやり酢昆布をかじっていた神楽が嬉しそうな声を上げる。新八は慌てて扉に駆け寄った。銀さんが帰ってきたのかな！？新八も期待を込めて待つ。足音がびたりと扉の前で止まる。

「御用改めである！真選組だ！開ける！」

新八は予想もなかった土方の声に、目を大きく見開いて神楽の方を向く。その神楽も、驚きと戸惑いの複雑な表情を浮かべていた。土方がキレると面倒なので、新八はとりあえず引き戸を引いた。土方に加え、沖田、近藤と見慣れた顔が立っている。しかし、その表情は固い。

「万事屋は居るか？」

しばらくの沈黙ののち、土方が閉ざしていた口を開いた。

## 第五訓 言って良いことと悪いことがある

突然の土方の言葉に、新八はただただ驚いた。なんせあの土方がわざわざ銀時に会いに来るなんてことがめつたにない珍しいことなのだ。そして、ただならぬ雰囲気に、銀時に何かあったことにまず間違いないとも悟った。

「銀さんに 何か用ですか？生憎本人は居ませんが、僕らで良ければ話を聞きますが。」

「銀ちゃんを疑ってるアルか！？そんなこと私が許さないネ！！もし銀ちゃんを捕まえるって言うならこの傘が火を噴くアル！！」

神楽は傘を引つつかみ、真選組の三人衆に銃口を向けた。沖田は余裕の表情で神楽に話しかける。

「おいチャイナ、もし俺を撃つたら公務執行妨害で逮捕するぜイ。近藤さんを撃つても一緒だ。あ、土方は別にいいぞ。」

「いや、俺を撃つても公務執行妨害だろーが！！！！」

土方はため息をつき、二人をなだめるように言った。

「まだ確証がある訳じゃねえ。とりあえず話聞きに来ただけだ。とにかくその傘を下ろせ。ホントに連行するぞ。」

神楽はしぶしぶ傘を下ろした。新八は土方を少しにらみつけるように見つめ、尋ねた。

「で、銀さんに何の話を聞こうとしてるんですか？」

「え、あ、いや、その…」

近藤は慌てたように目を泳がせる。土方と沖田は顔を見合わせた。

「話したっていいんじゃないですかイ？俺はそう思いますかねイ。」

「トシは どう思う？」

「俺も賛成だ。今奴の一番近くに居るのはコイツらだからな。」

二人の意見を聞き、少しためらうようにうつむいたあと、重々しく口を開いた。

「万事屋：坂田銀時が攘夷志士の可能性が出てきた。」

その言葉を聞いても、新八は内心あまり驚いていなかった。銀時が攘夷戦争に参加していたことを知っていたからだ。だが、それを口外してはいけないこともわかっていたので、新八は目を丸くして驚いてみせた。

「そんな！銀さんが攘夷志士のはずがありません！」

「そうヨ！あんなチャランポランが攘夷なんて大層なこと出来るわけないアル！」

銀時の素性全てとまではいかないが、新八も神楽も事情を少なからず知っている。本人が居ない今、自分達が余計なことを言ってしまう訳にはいかない。二人は銀時を守りたい一心で、必死に口裏を合

わせて演じていた。

銀時が関わっていると考えているのかいないのか、沖田も口を挟む。

「そーですぜ、土方さん。あの面倒臭がりの旦那がまた面倒臭い攘夷活動なんてしてるとは思えやせん。」

「オメーはどつちの味方だよ！俺がわざわざこうして出向いたのも、ちゃんとした根拠があるからで…」

「土方さーん、それさつきも聞きやした。もう飽き飽きなんスよ。」

「そんな飽き飽きされるほど言った覚えはないが、とにかく」

土方は新八と神楽に長々と根拠とやらを語った。どれも二人が…いや、銀時が少なからず関わってしまった事件の噂だった。やはり言うべきものではないと新八は思った。きっと神楽も同じだろう。

「所詮噂でしょう？僕らはそんな事件知りません。」

「私だつて知らないアル！ケケケ、そんな噂に流されるなんて警察の面目丸つぶれアルな！」

神楽の馬鹿にしたような笑い声に土方は少々青筋を立てたが、近藤が促し、一度帰ることにした。

「また来るからな。万事屋にそう伝えとけ。」

「一生来んなバーカ！！」

神楽はべーっと舌を出した。近藤が苦笑いで引き戸に手をかけた時

だった。

ドオオオン！！！！

凄まじい轟音が辺りに鳴り響いた。

銀時は夕暮れのかぶき町の大通りを急いでいた。

「ヅラには明日にでも謝つときゃいいよな……」

ぶつぶつ言いながら原チャリを飛ばしているうちに、やっと万事屋までたどり着いた。人通りは多いものの、空はもう黒く染まりかけている。

「ったく、こんなに遅くなっちまったぜ……」

階段を上がろうとした足をぴたつと止める。ゆっくりと木刀に手をかけた。銀時の周りには数十人の黒い影が、こちらに真剣らしきものを向けていた。

「おいおい、さっきから何？おたくら付いて来てたけど、俺に気でもあんの？残念だけど生憎俺は男に興味はねーんだよ。諦めてくれない？」

「さすがは白夜叉だ……。我々の尾行に気づくとは……」

リーダー格らしき男が言った。その男の合図で別の男が銀時に斬りかかってきた。銀時はそれを軽くかわし、木刀で男の首筋を殴る。

「ぐ…っ…」

ドサリと男が倒れる。銀時は木刀を肩に担いでため息をついた。

「不意打ちのつもりかい？まったく今日は何回その名前で呼ばれなきゃなんねーんだよ。俺はもう関係ねえっつーの。つーか、テメエら名乗りもしねえで斬りかかるなんざどーいう了見だ。銀さん怒っちゃっつよ？」

やる気なさげな声で気だるく言った。

「勝川舟様の配下の者とだけ言っておこう。」

リーダー格らしき男は口の端だけで笑った。そして合図をして、今度は全員で飛び掛かってきた。それを見た銀時は、すっと眼光を鋭くさせた。

「懲りねー馬鹿は嫌いだよ。」

そう呟くように言うと木刀を勢いよく振った。

ドオオオン！！！！

凄まじい轟音と共に砂埃が舞った。通りを歩いていた人々が一齐に砂埃の激しくなっている場所を見た。砂埃が消えた後のそこには銀髪の男が悠然と立っており、その男の周りには幾人もの男達が転がり、地面にはたくさんの真剣が刺さっていた。その場に君臨しているように立っている男の眼はまるで刃の輝きのような鋭さを帯びていた。

## 第六訓 愛情は人生のスパイス

轟音が鳴り響いた時、土方は真つ先に外へ出た。民衆がざわめき同じ一方向を見つめている。それらの視線を追った先には…

「万事屋!？」

銀時が立っていて、彼の周りには見知らぬ男達が倒れている。土方の後を追うように出てきた近藤、沖田、新八、神楽も、その光景を目の当たりにして驚いていた。

「銀さん!」

「銀ちゃん!」

口々に叫び、新八と神楽は階段を駆け降りる。土方も事情を聞こうと走った。

「おい、万事屋!」

「……。」

呼びかけたが、銀時は何も答えない。辺りが暗いせいか、銀時の表情は読み取れなかった。土方は銀時に近づいた。

「こりゃ何事だ?説明しろっ!？」

ぴたりと土方の歩みが止まる。ほぼ同時に、銀時がゆっくりと土方に顔を向き、目が合った。

それは、今まで見たことのない光を湛えていた。例えるなら、そう… 獣。今にも獲物に喰らいつこうと、狙いを定めている肉食獣のように鋭く光っている。視線を外すことが出来ない。頬に冷たい汗が流れた。

ただならぬ威圧感を身に纏った銀時に、土方は思わず剣を抜こうとした。が、近藤が土方の腕をつかみ、それを止める。

「止める、トシ。相手は一般人だぞ。それに」

言葉を切り、銀時を見た。土方は、自分の腕をつかむ近藤の手に力がこもるのを感じた。

「今の俺達じゃコイツに勝てるとは到底思えねえ…。今までたくさん強者を見てきたが、どいつもあんな眼はしてなかった。まるで化け物だ。」

土方は驚いて近藤を見た。自分よりも多くの修羅場をくぐってきた近藤ですら見たことがないと言うのだ。土方に敵う相手ではない。それに、あの眼を見た瞬間の近藤の緊張は、土方にもビリビリと伝わってきたほどだった。

「化け物か… 久々に言われたな」

「!?!」

いつの間に来たのか、銀時が土方の真横に立っていた。彼の目は死んだ魚のようないつも通りのものに戻っている。銀時はにやりと口の端を曲げて笑った。

「やっぱ、俺には向いてねーのかね… いろんなモンしよい込むこと

なんかよ。」

「お前…!?!」

銀時は振り返らなかつた。新八と神楽が心配そうに銀時を呼んだが、立ち止まることなくそのまま万事屋の中に入ってしまった。二人はその後を追いかけ、真選組の三人だけが残された。

土方はしばらく万事屋を見ていたが、はっと気づいたように沖田に指示を出した。

「総悟!とりあえずそこでのびてやがる奴らに事情聴取だ!運ぶぞ!」

「俺、そういう面倒なことはやらない主義なんでさア。土方さんだけやってくだせエ。」

「んだとコラアアア!!!」

なめくさった態度の沖田にキレつつも、土方はあのどこか哀しげに笑った銀時の様子が気になって仕方がなかつた。

『やっぱ、俺には向いてねーのかね…いろんなモンしよい込むことなんかよ。』

土方は、銀時が消えていった万事屋をしばらく見つめていた。

新八と神楽は、先へ行ってしまう銀時を必死になって追いかけた。呼んでも振り向いてくれない。新八は半分キレかけていた。

「銀さん!いい加減こっち向いてくださいよ!」

「銀ちゃん！」

「……。」

やはり黙っている。もう新八は耐えられなくなった。

「どうして銀さんはいつもそうなんですかつー！」

突然の怒鳴り声に、銀時の動きがぴたつと止まった。神楽も目を丸くして新八を見ている。

「何でそうやって一人で抱えようとしちゃうんですか！？何で誰にも頼ろうとしないんですかつー！！言ったでしょう！？僕のこと家族と思ってくれていいって！！家族は頼るためにあるんです！！！」

言いたいことがたくさんありすぎて、口を止めることができない。頼ってくれないことが、新八は悲しかった。

「僕は 頼って欲しいんです…。そうやって一人で抱え込まないでくださいよ…。たまには頼ってください…。」

神楽も眉毛を八の字に曲げて叫ぶ。

「私にも頼ってヨ！酔昆布あげるから！」

「何で酔昆布ううう！？いかにも物で釣ろうとしてるだろうがアアア！今の台詞でシリアスな空気ぶち壊しだよ！！！」

「何アルか、新八？そんなにシリアスになりたいなら、とうもろこしでもかじってるヨ。」

「シリアスとシリアルかけてるのか！？今時流行んねーよそんなボケー！！シラケるよ確実に！！！」

銀時はギャーギャーと騒ぐ二人を見つめていた。無理に尋ねてくることもなく、いつも通りに接してくれる二人の優しさがとてもありがたかった。

「すまねえ……」

銀時は小さくそれだけ言っつて、寝室に入っていった。謝られたことに少し驚いた二人だったが、少しでも銀時の力になれたことが嬉しくて、顔を見合わせて互いに笑みをこぼした。

銀時は寝室で寝転んで考えていた。頭の中でずっと引つかかっていることがあった。銀時を尾行していた謎の集団のリーダー格らしき男が言った一言……

『勝川舟様の配下の者とだけ言っつておこつ。』

勝川舟 どこかで聞いたことある名前だ。けど、どこで聞いたんだ？何で俺を知ってるんだ？俺も知ってるのか？どうして俺にかまってくる？今更白夜又なんて必要ねえだろ……

もやもやと考えてみたがやはり何かかわかるわけでもなく、とりあえず寝ることにした。あまり寝付ける気がしなかったが、無理矢理目を閉じた。銀時の視界は当然、闇につつまれた……はずだった。

「っ！？」

目の前に広がっていたのは、血の海だった。無惨に折れた刀、そし

て人間やら天人やらの腕や頭といったものが転がっていて、そこがどこなのかをはっきりと指していた。かつて桂達と共に戦った場所。二度と見まいと思っていた場所。今まで記憶から遠ざけてきたはずだった場所。その光景を目の当たりにした銀時は吐き気を覚えた。

そこは、戦場だった……

## 第七訓 怒り方には種類がある

寝たはずの自分が、何故こんな場所に居るのか：銀時は訳がわからなかった。見れば手にはしっかりと刀が握られている。これは夢だと言いつ聞かせようとしても、刀の冷たい感触があまりにも現実味を帯びていて、どうしても夢と現実の区別がつけられなかった。

「おい銀時！何をしている！」

突然かけられた聞き覚えのある声に、銀時は驚いた。

「ヅラ！？」

「ヅラじゃない桂だ！何をぼんやりしているのだ！油断しているとすぐ斬られるぞ！」

そう言つて銀時を睨みつける桂は、今の桂ではない。まだ十代の若き青年の姿だ。銀時はどす黒い血だまりに映る自分を見た。銀時自身も攘夷戦争に参加していた頃に戻ってしまったている。

「一体どーなつてんだよ！？何で若返つてんだ！？名探偵コンはジャンプじゃ連載してねーぞー！」

「何を意味不明なことを言っているのだ！！頭をおかしくしている暇はないんだぞー！！」

銀時の叫びに桂がキレる。んだとコノヤロー！俺は狂つてなんかいねえ！！目の前の光景がおかしいんだ！！その意味のわからんことを言っていること自体がおかしいのだ！今自分が置かれている状況

を忘れたか！！ギヤーギヤーと言い合いをする二人の前に、また新たに一人、男が現れた。

「テメエら何騒いでんだ？」

「ああ、高杉か。実は銀時が」

「高杉 だつて!？」

銀時の正面に立っている青年は、確かに高杉晋助その男だった。今はもう敵と言っても過言ではない男がこんなにも近くに居ることが信じられず、銀時はしばらく高杉の顔を見つめていた。銀時に見つめられ、高杉は顔をしかめた。

「何だよ気持ち悪い！俺の顔見てる暇があつたら、さっさとアイツのところに行けよ！」

「アイツ？」

アイツって誰だ…？銀時が考えようとした時、何とも空気の読めない大声が上がった。

「おい、金時イ！何しちゅうがかア！？」

「げっ、俺アイツの相手すると無駄に疲れるから先に行くぜ。」

言うなり高杉は目にも止まらぬ速さで駆けていった。

「俺も辰馬の相手をしている暇はない。先にアイツのところまで待つぞ。」

「おい、ツラっ！アイツって誰だよ！」

大声で叫ぶも、桂も走り去ってしまった。どいつもこいつも俺の話  
を聞かねえで イライラしている時にポンと肩に置かれた無遠慮な  
手。

「アハハハ！金時、おんしいつも以上にぼんやりしてるのう！アイ  
ツのそこには行かんのか？」

振り向いた先には、ヘラヘラと笑う坂本辰馬の顔がある。銀時は迷  
わずその顔面を殴った。

「うるせエエエ！！！テメエは何でいつもそうなんだアアア！！！  
それから俺の名前は銀時だアアア！！！」

鼻血をたらし、ふらふらになりながらも辰馬は笑っている。

「アハ、アハハハ 金時、暴力はいかんぜよ……」

その上学習能力もない。銀時はキレつつ辰馬の胸ぐらを掴んだ。

「おい アイツって誰のことだ？」

「何じゃあ、金時。おまん、アイツのこと忘れとるんか？昨日だっ  
て会ったばかりじゃろ？」

「会ってなんかねえ！」

「何じゃと？わしはもう会ったきに。てっきりおんしも会ったもん

だとばかり思うとったわ。アハハハ！」

「そいつの名前は何て言うんだよ!？」

「何じゃ金時、勝って名前は知つとるじゃろっ?」

「勝…?」

どっかで聞いた名前だな…

「何だ、まだ聞いたばかりだろう?」

いつの間にか桂が立っていた。隣りには高杉も居る。

「勝川舟だよ。本気で忘れたのか?」

勝川舟…!

『勝川舟様の配下の者とだけ言っておこっ。』

高杉の言葉を聞いた瞬間、見知らぬ男達に襲撃された時の記憶がフラッシュバックした。

「俺の 知り合いなのか…!？」

「忘れたとは言わせないぞ、銀時…」

「!？」

顔を上げた時、目の前に立っていた男と目が合った。銀時は、記憶

の扉が開かれるのを感じた。

刹那、世界がぐらりと揺れた。

## 第八訓 イカは齒に挟まりやすい

目が覚めた時、最初に映ったのは寢室の見慣れた天井だった。部屋が全体的に暗く感じられる。辺りはすでに夜のようだ。握られた手はひどく汗ばみ、銀時自身が驚くほどに息切れしていた。

「夢…か…」

小さく呟いてみる。わかっていたはずなのに、夢だったことに異常に安心している自分が居た。

「銀ちゃん？」

少し開けられた襖の前に、神楽が立っている。普段のチャイナ服に身を包み、眠そうに目を擦った。銀時が起きているのを確認したのか、ニコツと笑った。

「かなりうなされてたネ。大丈夫アルか？」

「ああ。つーかお前、ずっと起きてたのか？」

「うん。銀ちゃんに教えてあげようと思ったアル。ほら、これ」  
神楽はがさがさと一枚の紙を取り出した。今度江戸で行われる祭について書かれている。

「銀ちゃんと私と新八で行くアル！ね、行こうヨ銀ちゃん！」

ニコニコと笑っている神楽を見て、銀時は承諾せざるを得なくなっ

た。

「ああ…わかったからもう寝る。」

銀時の返事に、神楽はぱあっと表情を輝かせた。

「うん！おやすみ、銀ちゃん」

パタンと襖が閉まる。祭、か…それもいいかもな。銀時は再び目を閉じた。

とある屋形船の中。

万斎は高杉の前に一枚の紙を広げた。

「晋助、これを見るでござる。」

江戸で行われる祭の宣伝が書かれたものだった。高杉はそれを見るなり、愉快そうに含み笑いをした。

「ククク…決まったか。」

「これには將軍は出ないが、かなりの規模の祭らしい。序章にはもつてこいの舞台でござるよ。」

「決まったんスか!？」

明るい声が響いて、新たに二つの影が現れた。赤い弾丸と称される来島また子と武市変平太だ。

「ああ、大体は。もう準備に取りかかったほうがいいでござる。」

「またあの夜兎族の少女に会える訳ですね。あの少女は十年もすればホントすごいことに…」

また子は両手で拳銃をくるくると回しながら武市に怒鳴った。

「先輩っ！！ロリコンはいいつスから、さっさと準備するっスよ！」

「私はロリコンじゃありません。フェミニストです。」

言い合いをしながら、二人は行ってしまった。万斉が深いため息をつく。

「まったく…嵐のような奴らでござるな。俺もあれの様子を見てくるでござるよ。」

「ああ…」

高杉の返事を聞くと、万斉は出ていった。万斉が出ていってしばらくした時だった。座って月を眺める高杉の元に、一人の男が現れた。

「高杉…あれの様子はどうだ？」

「勝か。今万斉が見にいってるぜ。」

「そうか。あれはかの紅桜よりも性能がいい反面、少々繊細だからな。完成するまでは使っなよ。」

「フン…今の鬼兵隊には岡田のような奴ア居ねえ。」

岡田似蔵…そんな奴の名前を覚えていたとはな。高杉は過去に関わりがあった人間には干渉しないと思っていた勝は、少し驚いた。余程あの失態を根に持っているのだろうか。

「もう少しで出来上がるぞ、晋助…これは勝殿、来ていたでござるか。」

「万斉殿 ご無沙汰してますな。そうだ高杉、俺も見ていいか？あれを…」

「……好きにしろ。」

高杉の言葉に勝は頷き、万斉に向き直った。

「万斉殿、案内してくれますかな？」

万斉は黙って歩きだした。勝もその後が続いて行った。その間高杉は、二人の後ろ姿を見送るでもなく、紅く光る月を前に三味線を奏でていた。

入り組んだ薄暗い廊下をしばらく進み、一つの扉の前で万斉は立ち止まった。

「ここにござる。」

「では、失礼して。」

勝は扉を開いた。そして部屋の内部へ足を踏み入れる。

その部屋の中央に、それはあった。

ポコポコと異様な音を立てている液体の中に、緑と黒が入り混じったような不気味な輝きを放つ刃。

「おお！」

勝は感嘆の声を上げた。

「素晴らしい これこそが、私の求めていた究極の刀 榎宗……！」

「私のデータでは榎宗は情報を取り込み成長するスピードは紅桜の倍以上。もう少し育てれば、完璧な逸品が出来上がりますよ。」

万斉と勝と一緒に居るのを見つけてか、武市が歩み寄ってきた。武市の自信ありげな言葉に、勝は口の端に笑みを零した。

「期待していますぞ、万斉殿、武市殿。」

榎宗にもう一度視線を向けると満足そうに頷き、勝はその場から立ち去った。

さあ…榎宗はどういう働きを見せてくれるのか、楽しみだな

勝は目に焼き付いたあの毒々しい輝きを思い浮かべ、内から込み上げてくる悦びを抑え切れずにいた。出口に向かい、そして出る頃には、腹の底からの高笑いが辺りに響いていた。

## 第九訓 どうでもいいことは頭から離れない

次の日、銀時は真選組の屯所の前に立っていた。自分が疑われていることを承知の上で、ここまで来た。どうしても聞きたいことがあったのだ。銀時は何の躊躇いもなく屯所の門をくぐった。途端に刃が銀時に向けられる。恐らく銀時と交わりがない下っ端の隊士達なのだろう、警戒心丸出しの目をしていた。まあ、無理もない。廃刀令のこの御時世に、腰に木刀を挿して来たのだから。

「貴様、何奴！？ここが真選組と知っての行動か！？」

「さては攘夷浪士だな！？公務執行妨害で」

「うるせーよ、隊士Aに隊士B。テーマらなんざ所詮漫画に居るか居ないかの存在だろーが。」

「酷い！俺達アニメに出られるように日々努力してたのに！原作の指摘してきやがった！」

「どうしてくれんだよ！これでもう俺達コマにも画面にも出られなくなっちゃったじゃないか！！」

「そんなこと俺が知るか！！」

「あれー？旦那じゃねーですかイ。」

声のした方を見ると、そこには沖田が立っていた。銀時はニヤリと笑って隊士達を指した。

「悪いけど、この頭の固い馬鹿共の相手してやってくれない？」

「えー！？ちょ、あ、隊長！別にいいですからっ！」

「そっ、そうです！間に合ってます！いつ、忙しいでしょう！？俺達の相手してる暇なんかありませんよね！？」

涙目になって慌てふためく隊士達。その顔を見た沖田の表情が、サディスティック星の王子に変わった。

「任せてくだせエ、旦那。近藤さんは今ストーカーしに出掛けてますが、土方の馬鹿ならあつちで刀の手入れしてまさア。」

「おー、気が利くねえ。」

銀時は隊士達を沖田に受け渡し、奥へと向かった。それとほぼ同時に、背後から隊士A Bの断末魔が聞こえた。

沖田に教えられて来てみたものの、人の姿など何処にも見当たらなかった。諦めた銀時は、声を出して呼んでみることにした。

「ひーじかーたくーん。」

ものの数秒もしないうちに土方が出てきた。

「何か用か？」

「用がなかったらこんなどこにわざわざテメエを訪ねるわけねーよ。友達のいねえ土方君の友達はやりたいくねーし」

「ジュッ！」

土方は銀時の言葉を遮り、頭にくわえていた煙草を押し付けた。

「ギヤアアア！！何しやがるテメエエエエ！！」

「確かに俺は友達がいなさそうに見えるかもしれねえが、いねえ訳じゃねえ！！」

「嘘つけ！こんな命を危険にさらすようなことする奴なんか誰も友達にしねーよ！たとえ心の広い銀さんだって、こればかりは譲れないよ！？」

「何の話だよ！！っーか用事があるのかないのかはつきりしやがれ！！！」

その言葉を聞いたとたん、銀時はふっと真顔になった。土方も真剣な話だと悟って黙り込んだ。しばらくの沈黙の後、銀時は口を開いた。

「お前、俺を襲ってきやがった野郎共は知ってるよな？」

「ああ。だが、そいつらがどうかしたのか？」

「お前、勝川舟って知ってるか？そいつらが言ってたんだよ。自分達は勝川舟の手下だったな。」

勝川舟という名前を出すと、土方は目を丸くした。

「勝川舟だと！？幕府のお偉いさんじゃねーか！！」

「え？そうなのか？」

「ああ 俺達でも会ったことがねえ、老中の勝川舟……。まだ俺やお前と年も変わらねーって話だ。幕府じゃキャリア中のキャリアだな。」

幕府のキャリアねえ……。そんなに幕府が好きだったのか？あのヤローは……

「……い おいつ！万事屋！」

ぼんやりと考えていた銀時は、土方の声で我に返った。

「俺の話を聞け！」

「悪い、悪い。で、何だよ？」

「お前はその勝川舟と何か関わりを持つてるのか？」

突然の質問に一瞬面食らったが、銀時は土方を馬鹿にするように鼻で笑った。

「土方君馬鹿でしょ？こんなごく普通の一般庶民が幕府のキャリアとお友達なんてやってる訳ねーだろ。それとも何？そいつに俺が関わってそうな曰くでもあんの？」

銀時に馬鹿にされた土方は、額に青筋を立てていたが、それを聞いたとたん真顔になった。

「お前が関係あるのかどうかは知らねーが、勝川舟に曰くがあるのは確かだ。」

「へえ で、何？」

「勝川舟は俺達の間じゃ名の通った人間だ。だが、そいつについて知ってる人間はほとんど居ない。」

「そりゃどういうことだ？」

「奴がどこの出身でどこで学んだとか、どういう風に幕府に入っ  
て、何をして昇進したのかとか、そういうのが全て不明なんだよ。  
しかも奴にはある噂が幕府内で流れてるんだが」

土方はそこで言葉を切った。そしてゆっくりと言った。

「勝川舟は攘夷戦争に参加していたらしい。」

「！」

やっぱりアイツは 夢に出てきたあの男は…

「そうか。情報どーもありがとさん。」

「とても礼を言ったようには聞こえねーな」

「誰がテメーに心の籠った礼なんかするか。勿体ねーよ。」

「んだとゴルア！！今ここで叩き斬ってやるーか！？」

「一般人に剣なんか向けちゃ駄目だろーが！！奉行所に訴えるぞ！  
！」

すると、土方は眼光を鋭くさせた。

「悪いが俺は、お前のことを一般人だなんて思ってねえ。」

「は？」

「俺達が昨日捕まえた奴ら、全員が攘夷浪士で帯刀していた。しかも真剣だ。それをテメエはその木刀一本で薙ぎ払った。その時点でまず一般人とは言わない。」

「見掛けで判断かよ。副長がそれじゃ、真選組の名が廢るぜ？」

銀時は普段通りのヘラヘラした口調で言ったが、その眼は笑っていなかった。

「残念なことに、奴らはどいつも下っ端だったから、詳しいことは何もわからなかった。けど、全員が口をそろえて言ったことがあった。」

「何だよ？」

「奴らを纏めていた、要は“勝川舟”と名乗る人物が、お前を必要としていたらしい。」

「俺を？」

どうして奴は今更俺なんかを…

銀時の中にまた一つ疑問が増えた。

「ここは噂が通りやすい場所だから、お前の話を誰かから聞き付けて追い追い襲わせたのか、もしくは…」

「もしくは、何だよ？」

「昔からお前のことを知っていて、そうしたのか。」

土方は銀時を睨みつけ、銀時も土方を睨みつけた。不意に銀時がふつと頬を緩ませ、視線を外した。

「そんなに俺のことが知りたきゃ、教えてやっても良いぜ？」

「！」

「ろくなことやってこなかったが、別に隠すほど大層なモンでもねえし。」

「……」

「ま、テメーはそんな方法で調べつけようなんざ思わねえよな。」

土方は黙ったままだったが、きつと返す言葉も見つからないのだから、少し悔しそうに見えた。動かない土方を見た銀時は、黙って歩き出した。

「…万事屋。」

呼ばれて立ち止まる。

「仮に、テメエを調べ上げて、俺らが事情聞かなきゃなんねえこと

になったら、大人しく従って貰うからな」

「…ああ。けど、自分で言うのも何だが、俺を調べ上げんのはちょっと骨があるぜ？」

銀時がそう言うと、土方は身を翻して奥へ入っていった。それを見送ると、銀時は静かに屯所から出た。

## 第十訓 鉛筆を正しく持てる奴は箸を正しく持てない

「今日の月も紅いな」

ぼつり、と高杉は空を見上げながら呟くように言った。隣りを歩いていた勝は少し驚いた顔をした。

「ほう…お前も月を見たりするのさ。」

「そんなに驚くようなことか？」

高杉が尋ねると、勝は小さく笑ってから言った。

「こんなこと言うのは少し失礼かもしれないが、今のお前はこの世界を破壊することしか頭に無いのだと思っていた。」

「あの日の月も、こんな色をしていた…」

「あの日？」

「俺の…俺達の運命が変わった。この世界に松陽先生を奪われたあの日。」

間髪を入れずに答えた高杉の表情は、怒りを露にしているように見えた。

「クク だが、もうすぐだ。アレも完成した。」

「アレはまだ試作品だ。とりあえず試しに誰かが使ってみなければ……」

「心配は入らねえよ……。もう手駒は用意してある。」

二人は立ち止まった。その視線の先には毒々しい色をした不気味な刀。柁宗が爛々とした輝きを放っていた。勝川舟……アイツに出会ったのは、もう俺が攘夷戦争に参加していた頃だ。確か、俺は飛び掛かってくる天人達を斬ってたが、あんまりにもきりがいいから偶然見つけた岩の陰に隠れた。

「……まったく、あとどんだけ倒しやいいんだよ……」

「……………」

「……!？」

小さく呻き声が聞こえて辺りを見回したら、死体の山の中に動く影を見つけた。俺は急いで駆け寄った。

「おい!しっかりしろ!」

「……だ、れだ……?」

男は意識を朦朧とさせながらも、敵意剥き出しの眼で俺を睨んできやがった。コイツ、生きる気はある。そう思った俺は、そいつを抱えてツラの所に急いだ。

「……どうした銀時。その男は誰だ?」

「知らねーよ！とにかく早く手当てしてやってくれ！」

ソイツが目を覚ましたのは、俺が運び込んでから三日後の朝だった。

「ここは…？」

「おー、目エ覚めたんだな。」

俺と目が合って、ソイツは起き上がるなり傍らに置いてあった刀を抜いた。

「貴様、何者 っ！」

「まだ動かない方が良くないじゃねーの？傷口が開いちまう。」

「……。」

「あー、俺は坂田銀時っつーんだ。っーか、テメーこそ誰だ。」

「…勝川舟と言つ者だ。」

真面目で堅そうで、俺とは反りが合わねえ。それが奴に対する第一印象だった。

「銀さんっ！」

「あ？」

物思いに耽っていた銀時が顔を上げると、向かい側に座った新八が、少し眉をつり上げてこっちを見ていた。

「さつきからもうずっとですよ？僕らの話全然聞いてないじゃないですか！」

「そうか？悪イな」

銀時の鈍い返事を聞いて、ジトツとした目で銀時を睨んでいた神楽が、新八に耳打ちをした。

「新八、銀ちゃんがぼけっとしてる時はチャンスアルよ！何だかんだ理由をくつつけて色々買わせるネ！」

「かーぐらちゅわーん？全部丸聞こえて全然耳打ちになってねーぞコルア！ーウチが万年金欠なのはもう十分分かってんだろ！？」

「良いじゃないですか！祭の時くらい！」

「そーヨ！せめてわたあめの10個や20個、買ってあげるべきネ！」

「桁が一つ多い！普通1個や2個だろーが！！わたあめそんなにイライナイ！…っーか、祭って？」

銀時のその反応に、新八と神楽は目を丸くして顔を見合わせた。

「銀さん、神楽ちゃんの話聞いてなかったんですか？」

「は？」

「私ちゃんと言ったアル！ひどいヨ、銀ちゃん！これはわたあめ100個に値するアル！」

神楽が言ってた…祭？

『銀ちゃんと新八と私で行くアル！ね、行こうヨ銀ちゃん！』

神楽の言葉と共に、昨日見せられた祭の宣伝の記憶が鮮やかにフラッシュバックした。

「ああ！思い出した！今度の祭のことか！」

「昨日のことなのに思い出すのが遅すぎですよ！」

「もう頭だけじゃなく、中身もジジアルな」

「おい、神楽！さりげなく髪のこと言うな！あーもう銀さん傷付いた！もう何にも買わねー！」

「何を言うネ！元はと言えば全然思い出さなかったお前が悪いアル！この腐れ天パ！」

「あっ！また言いやがったなコノヤロー！！ホントに何にも買わねーからな！！！」

「もう二人とも！喧嘩は止めてくださいよ！」

「うるせー！！このダメガネ！！！」

「んだとゴルア！！！」

これがきっかけで、銀時VS神楽の戦いに新八も加わってしまい、

三つ巴の大戦争に発展した。ギャンギャン怒鳴り合い、手が出、足が出、下の階から苦情がくるまでこの争いは続いた。

## 第十一訓 困った時は実家に電話しろ

色取り取りの提灯が吊り下げられ、出店が軒を列ねている。人々の笑い声が飛び交い、花火が夜空に打ち上げられ、江戸には祭ならではの明るい雰囲気、辺りに漂っていた。

「銀ちゃん！私、射的してくるアル！」

「へーへー…もう勝手にどこへでも行きやがれ。そしてしばらく戻って来るな。うるせーんだよ。」

大はしやぎで駆け出していった神楽を見送った新八は、出店の居酒屋で酒を飲む銀時を振り返った。

「せっかくの祭なのに、銀さんはどこにも行かないんですか？」

銀時はボリボリと頭を掻き、怠そうに言った。

「やれ射的だー、やれ花火だーって、馬鹿共がうじゃうじゃうじゃうじゃ めんどくせーんだよ、わざわざそーいう所に行くの。無駄に体力消耗するだけだろーが。」

「アンタ、ホントにこーいうの楽しめない人ですね。僕、行っちゃいますからね？気が向いたら来てくださいよ。」

「おー、多分向かねーけどな。」

新八はため息をついて店から出ていった。しばらく一人で飲んでみると、元入国管理局局長で現ホームレスの、長谷川泰三が銀時の横

に来た。

「よお、銀さん。俺、今日はここでバイトなんだ。この居酒屋の親父さんがいい人でさ。公園のベンチで縮こまっていた俺に話しかけてくれたんだよ。」

「へえ、よかつたじゃねーか。けど、グラスンはどうしたんだよ？」

銀時は長谷川の目元を指差した。そこにいつものグラスンはなく、銀時と同じような、死んだ魚のような目が丸出しだった。

「ああ、これ？グラスンだと居酒屋の雰囲気怖くなるから外せつて言われちゃってさ。仕方なく外したんだよ。」

「いやー、でも長谷川さん。アンタがグラスン外するとき、俺とキャラ被っちゃうと思うんだよね。それに」

銀時はカウンターの方を振り返り、居酒屋の店主の顔を見た。顔の数ヶ所には刃物で切られたような傷痕がある。

「ほら、あの顔見て！どう見ても最初に“や”が付いて、最後に“ざ”が付く人にしか見えないよね！？別に長谷川さんがグラスン外さなくても怖いから！もうこの辺の空気、明らかにナント力組みたいな感じだから！」  
「ん？何だい、兄ちゃん。俺の顔に何か付いてるか？」

店主に見つかり、銀時は冷や汗をかいた。

「あーいやいやいや！べべ別に何も付いてませんよ！？これといって特に何にも！ただちよつと顔に傷が付いてるかなーみたいなの！」

「ああ、これか？いやー、初めてのお客さんにはいつも聞かれるんだよなあ。数年前にちよいと猫とやり合っちゃってね。そんな時に付いた傷なのさ。」

「猫オオオ！？猫と何をどうしたらそんな傷が付くんだよ！？アレだよな！？殺り合ったんだよね！？おじさん、猫と死闘を繰り広げちゃったんだよね！？」

「俺はねえ、兄ちゃん。こうしてお客さんが静かに酒を飲める店を作るのが夢だったんだよ。」

「おじさん思いつきり話そらしたよ！！無理に話題変えちゃったよ！！！」

「最近の居酒屋っちゅーのは、カラオケだー何だっつうるさいモンばっか並べやがってねえ。俺が思うに、居酒屋はこうして店主とお客さんが話しつつ酒を飲む。そういうモンじゃないかって思うのさ。」

「親父さん……」

隣で涙を流す長谷川。

「ちよっ、何？この空気。何か急にしんみりしちゃったな。」

「俺も親父さんに同感だ。」

後ろから聞こえた声に、銀時は驚いて振り返った。

「ツラ!? お前、何でこんなとこにいやがんだ!？」

そこに立っていたのは桂小太郎だった。その後ろには勿論エリザベスもいる。

「ツラじゃない桂だ。俺も最近の居酒屋は好きではない。こうしてゆったりとした空間で酒を酌み交わす。これこそが真の居酒屋というものだ。」

「何わかったような口聞いてんだよ!? 大体お前にゆったりなんてしてる余裕なんかねーだろーが!！」  
「今はこうしていても問題ない。先程真選組に出くわしたが、撒いてきたしな。」

「かーつらアアア!!!！」

「全然撒けてねーじゃねーか!！」

バキッ!!

銀時は桂の顔面を思いきり殴り付けた。

「ぶふお!! 銀時、貴様何をするっ!！」

「うるせー!! 何でデメエはそういちいち馬鹿なんだよ!！」

言い返そうとした桂だったが、バズーカを担いで追ってきた沖田を見て、俊敏な動きであつという間に人混みの中へ紛れていった。それと入れ替わりに沖田が入ってきた。

「旦那、今さっきここに桂がいやせんでしたかい?」

「さあな。うざったいロン毛の奴なら、さっき慌てて出てったけどな。」

「チツ 逃げ足だけは速い奴でイ。」

「そんなことより、俺についての調べは進んでんのか？」

人混みに目をやる沖田に銀時が尋ねると、沖田は人混みを見つめたまま言った。

「アンタに関わったと思われる奴らは皆、大体同じようなことしか言わねえ。あの時は助かっただ、お礼言っといってくれだつてねエ。」

「フン まあ、せいぜい骨折でもするくらいにやってくれや。お前、普段から暇そうにしてるし、たまには働けて良いんじゃないの？」

銀時の言葉に、沖田は淡々と答えた。

「確かに、良い気分転換程度にはなるかもしれない。最近是人斬りやら爆撃やら、面白い事件もありやせんし。」

「何この子！警察のくせに物騒なこと言っちゃってるよ!？」

「しかも今回は、この前と違って將軍が来る訳でもねえし、俺達も存外気が楽でさア。」

「オイオイ 武装警察とは言え、一応江戸の平和を護るのが仕事なんだろ？そんなに弛んでちゃ、急に襲撃されても対処出来ね」

ドオオオン!!

銀時が言いかけた時、突然鳴り響いた轟音。それに驚いて慌てふためき、逃げ出す人々に、辺りは混乱の一途をたどった。真選組隊士の一人が、沖田の元へ駆けて来た。

「隊長オオオ！！大変です！！何やら妙な刀を振り回す男が」

銀時は何か嫌な予感がして、人々が行く方とは逆の方向へ走り出した。

「どこ行くんでイ、旦那！！」

沖田の叫ぶ声がしたが、銀時には振り返る余裕などなかった。

## 第十二訓 百円を拾ったらずく交番へ

「新ハイイイ！！神楽アアア！！」

銀時は二人を探しながら走っていた。しかし、この混乱のせいもあり、中々見つからない。

「クソツ…アイツら、どこへ行きやがった！」

「銀時！」

「ツラか！？新八と神楽知らねーか！？」

「さっき見掛けたぞ！こっちだ！」

銀時は桂の後に付いて走った。走りながら桂が話しかけてくる。

「銀時 お前も感じているだろうが、俺はどうにも嫌な予感がする。」

「ああ…急ごうぜ！」

走り続けた二人は、やがて拓けた場所に出た。どうやら広場のようだ。そこで目にしたものは、驚くべき光景だった。

「何だ！？ありゃあ…」

「刀 なのか…！？」

広場の中央で、男が暴れ回っている。そして、その手に握られているのは、刀と言うには余りにも禍禍しい輝きを放つものだった。男の動きを止めようと、何人もの真選組の隊士達が飛び掛かるが、男は人間とは思えない速さでそれらを薙ぎ倒していく。それは前に銀時が目にした“妖刀紅桜”を思い出させた。しかし、その力は紅桜よりも遥かに上回るものだった。

銀時がそれに見入っていると、新八がこちらに駆け寄ってきた。何やらものすごく慌てているようで、息が上がっていた。

「新八！どうした！？」

「ぎっ、銀さん…ハア…か、神楽ちゃんが 神楽ちゃんがアイツに突っ込もうとしてるんです…！」

「はあ！？つたく、あのバカ…！」

いくら神楽が最強と謳われる戦闘種族夜兎でも、あの華奢な身体ではかなり無茶なことだ。銀時は止めさせようと神楽を探したが、既に遅かった。

「止まるネエエ！！この怪物がアアア！！」

傘を振り上げて跳んだ神楽だったが、男の持つ刀に弾き飛ばされた。

ドカツ！

「ぐうっ …あ、れ…？」

思っていたよりも少ない衝撃と、包まれるような温かさを感じて、神楽は上を振り仰いだ。

「つたく、世話の焼けるガキだぜ…」

「銀ちゃん！」

間一髪の所で、銀時が神楽を受け止めていたのだ。新八もほっと胸を撫で下ろした様子で駆け寄ってきた。

「もー、神楽ちゃん！あんまり危ないことしちゃダメだよ！」

「悪かったアル。」

反省した様子 of 神楽を降ろし、銀時は腰に挿していた木刀を引き抜いた。

「テメーらは下がってる。今からここはガキ立入禁止だ。」

いつになく真剣な銀時の言葉に、新八と神楽は大人しく引き下がった。

「行くぜ、ツラ。」

銀時は隣に立った桂に声を掛ける。

「ツラじゃない桂だ。言われなくとも」

二人は同時に跳躍した。

「わかっているー！！」

ガキイイーン！！！！

刀と刀がぶつかり合う音が響いた。

第十三訓 人間は7時間以上寝ないと早死にするって知ってた？

真選組屯所。

「トシ、総悟、ちょっと来てくれ。」

「何だ？近藤さん。」

「仕事だ っつて、総悟はどうした？」

近藤と土方は辺りを見回したが、沖田の姿は影も形もなかった。土方がキレて刀を手に立ち上がった。

「アイツ、またどつかでサボってやがるな！」

「まあ、トシ。そんなに青筋を立てるなよ。今に始まったことじゃないだろ？」

「…そうだな。」

近藤に宥められ、土方は大人しく座った。と、まるでタイミングを見計らったかのように沖田が入ってきた。

「おお、総悟！やっと来たか！」

「すいやせん、近藤さん。トイレにこれが詰まってて、出るのに時間がかかりました。」

そう言っつて沖田が取り出したのは、バトミンソンのシャトル。犯人

はただ一人、アイツしかいない。

「山崎の野郎オ　！タダじゃおかねえ！！」

山崎の運命はこれで決まってしまった。近藤は咳ばらいをして、本題に移った。

「さっきは中断したが、改めて言う。警備の仕事だ。」

「今度はどこのどいつだ？」

「また意地汚ねエ天人官僚のお守りだったら、俺はやりませんぜイ。」

「いやいや、そういうんじゃないよ。祭での警備さ。今回は將軍様は参加なさらないとは言え、気を抜く訳にもいくまいよ。前のように、突然襲撃されることもあるからな。少しはリラックスしていても良いが、あまり気は抜くなよ。」

近藤が出て行った後、土方も出ようと立ち上がった時に沖田が口を開いた。

「山崎、かなり手こずってるみたいですね？」

何の話かを悟った土方は、沖田に向き直った。

「旦那と関わった人間は星の数ほどいるが、旦那の過去を知る人間なんて、米粒ほどもいねエみたいでさア。」

真選組の監察ですら情報をこれっぽっちも引き出せないとは

「奴、言ってたな。奴を調べ上げるには相当骨折らねーといけねーらしい。つーか、これじゃ全身骨折しても難しいな。」

「旦那本人が言ってるんじゃないや、俺達はかなり無理あることやってるってことですかイ？」

「かもな。だが、俺は諦める気はねえ。もし奴が本当に攘夷志士なら、アイツと繋がってる攘夷浪士達もわんさかいるはずだ。そいつら全員取っ捕まえりゃ、それだけ爆撃も襲撃も抑えられる。」

「俺にはあの旦那が攘夷なんてモン志してるだなんて、到底思えやせんがねエ。ま、もしそれが本当なら、俺は旦那を斬るだけでさア。」

一瞬、目に殺気を宿した沖田だったが、すぐに戻すとそれきり黙って出て行った。土方はその後ろ姿をチラッと見てから、刀の手入れをするために立った。

「フン 総悟の奴、珍しく本気だな。それだけ信じられねえってことか。」

小さく呟き、土方は奥へと戻っていった。

#### 第十四訓 出店の金魚は必ず病気を持っている

祭の雰囲気に触発して、笑い騒ぐ人々で賑わう中央広場。真選組監察の山崎退は大きな欠伸をした。

「真選組の警備がこんなに暇なの、初めてじゃないですか？ていうか、これ警備する必要あるんですかね？あんまり暇なら、俺的には明日ミントンの試合があるから帰りたい」山崎、歯食いしばれ。「バキッ！！」「ぐふっ！！」

「いかなる時にも油断は禁物。山崎イ、テメエ切腹でもするか？」

「いつ、いいえ！結構です！あ、たこ焼きでも買ってきますね！」

そそくさと立ち去ろうとした山崎を、土方は呼び止めた。

「おい、あれからどうだ？」

「万事屋の旦那のことですか？まるで何もありませんよ。寧ろなさすぎて気持ち悪いくらいに。攘夷なんて文字はどこにも浮かんできやしないし、大体あの噂だって正しいかどうかは定かではないし。まあ、まだ探ってはみませんがね、旦那が今までどんな仕事してきたのかはわかりませんが、天人が出入りするクラブだとか結構危険な場所もあって。監察の俺がこんなこと言うのもアレですけど、怖いんですよね。たこ焼き買ってきます。」

天人のクラブなんて、犯罪の巢窟じゃねえか。それでもアイツの名は出てこねえ。どういうことだ？

悶々と考え探ってみるものの、最もらしい答えが見つかるでもなく、

土方はため息をついて煙草を取り出した。

「考えるだけ無駄だな。今は警備に専念しねえと…」

「副長オオオ！！大変ですううう！！！！」

突然の大声に、土方は驚いて出した煙草を取り落とした。

「煙草無駄になっちまったじゃねーか！！」

「すつ、すいません！でも今はそれどころじゃないんです！妙な刀を手にした男が、暴れ回りながらこっちに向かって来てるんです！このままじゃ混乱に成り兼ねません！！」

「何！？」

土方は周りを見回してからチツと舌打ちした。幕府の高官などが参加しない分、いつもよりも警備は手薄で、警戒体制にも入っていない。油断してしまっていた。

「おい、総悟はどうした？」

「それが、隊長の姿がさつきから見当たりません！」

「あのヤロー 肝心な時に！」

「副長！先程入ってきた報告では、隊士数名が男の動きを止めようとしてましたが、余りに勢いが強すぎて止められず、どんどこちらに近づいてきているとのことです…！」

「何!？」

真選組の戦力が押されてる!？」

とても信じられることではないが、土方は最悪の場合を想定して、広場にいた人間を全員避難させることにした。

「おい!ここにいと危険だ!全員避難しろ!」

「おい。」

「あ?」

振り返るとそこにはたこ焼きを手にした神楽が立っていた。

「何やってるアルか?相変わらずマヨネーズにまみれた税金泥棒。」

「まみれてねーよ!!それから税金泥棒じゃねえ!!つか、テメエも早くここから離れる!」

「もー、神楽ちゃん!山崎さんのたこ焼き盗ったんだって!?!ちゃんと返しなよ!」

「何だヨ、新八い!お前はそうやって地味な奴の味方ばつかやってるからいつまで経っても地味なままなんだヨ!!」

「何それエエ!?!別にそれ関係ないでしょ!!ていうか、地味って言わないでくれる!?!神楽ちゃんにはわかんないかもしれないけど、地味って言われると結構傷付くってあれ?土方さん、何やってるんですか?」

「眼鏡のガキか。丁度良い、そのバカを連れてここから離れる。」

「バカとは何アルか！？心外ネ！！」

「えっ、離れるって 何かあつたんですか？」

ギヤーギヤーと騒ぐ神楽を無視して、土方は口を開いた。

「もうすぐここに、刀を振り回して暴れる男が来る。真選組の隊士が止めようとしているが、情けねえが無理らしい。なるべく被害を最小限に抑えたいんだよ。だから一般人は大人しく離れてろ。」

「副長オオオ！！来ましたアアア！！」

「チツ 思ってた以上に早いな。これでわかつただろ？さっさと」

「倒せば良いアルな？」

「は！？テメエ、何言つてやがる！！」

「そつだよ、神楽ちゃん！無茶なことは止めた方が」

「ガアアアアア！！！！」

ガシヤアアアン！！！！

雄叫びと何かが壊される大きな音が響いた。思わず目をやると、まるで自我を無くしたかのように白目を剥いて激しく暴れている男がいる。そして、その手には

「何だ ！？あの刀は…」

刀と呼ぶべきものかどうかもわからない、余りにも禍禍しいオーラを発するものが握られていた。

それを見た新八は、すぐにビビって情けない声を発した。

「ウヒヤアアア！！やっぱり無理だよ、あんなの相手にするの！！銀さんは近くにいないし！！」

「銀ちゃんなんかいなくても平気アル！税金泥棒達がダメな今、万事屋の私達がどうにかするしかないネ！私がアイツを止めてるから、オマエはさっさと銀ちゃんを呼んでくるヨロシ！」

神楽は傘を担いで走って行ってしまった。

「どっ、どうしましょう土方さん！神楽ちゃんが！！」

「総悟といい、あのバカといい、ガキつてのはどうにも迷惑をかけたがるらしいな！とにかくお前は万事屋を呼んでこい！！」

「はっ、はいっ！！」

新八が走っていった後、土方は腰の刀を抜いた。

「今万事屋を呼びにいつでも間に合わねえ。あのガキは俺が探し出して止めるしかねえか。それにしても…」

いくら見慣れない刀を握り、そして人間とは思えない素早さを持ち合わせている相手とは言え、何も出来ないうちに飛ばされていく隊士達に、土方はイラつきを覚えた。噴火寸前までいった土方だったが、頭に水を被った。そして、今やるべきことを冷静に考えた。

「今はイラついている時じゃねえ！そんなことよりあのガキどこまで行った…な！？」

土方の目に入ったのは、攻撃を仕掛けようとしているのか、神楽が男の眼前に跳んだところだった。案の定弾き飛ばされた神楽を、土方は受け止めようと走ったが、距離がありすぎた。

クソツ、間に合わねえ

そう思った時だった。銀色の影が前を横切り、神楽の身体をしっかりと受け止めた。銀時だ。

「アイツ、間に合ったのか」

ほっとしたのもつかの間。次の瞬間、土方は信じられないものを見た。木刀を抜いた銀時の隣に立ったのは、全国指名手配されていて、真選組も追っている攘夷志士の桂小太郎。しかも、銀時はその桂と言葉を交わしたのだ。まるで、昔からの仲であるかのように。そして彼らの眼が鋭いもの変わったかと思うと、二人は揃って跳躍し、男目掛けて刀を振り下ろした。

それは、まるで鬼神のごとき強さだった。真選組の隊士達は追いつくことが出来なかった男の速さには、追いつくどころかそれよりも数段速い速度で、繰り出してくる度に無駄のない動きでかわした。そして、強く素早くしなやかに、しかも的確に確実に急所をついた剣捌き。ばらばらになることがないコンビネーション。

その場からは、刀と刀が交わる音以外、何一つ響きはしなかった。

## 第十五訓 テレビは叩いても直らない

男が力任せに振ってくる攻撃をかわして、桂は男の脚に刀背打ちを食らわせる。男は体制を崩し、隙が出来た。

「うらあああああー!!」

バキイイッ!!

完全に弱り切った男の頭上に躍り上がった銀時は、木刀を振り下ろして止めの一撃を刺した。余りに強い力が掛かったせいか、木刀は男の頭に打ち落とされた拍子に真つ二つに折れた。ストツと銀時が地に降り立った時、男がゆっくりと倒れた。

「あーあ…また買い替えなきゃねーか」

洞爺湖の残骸を拾い上げ、銀時は顔をしかめた。そんな銀時を見て、桂はフンと鼻を鳴らした。

「どうせまた通販なのだろう? “星碎” だったか?」

「ツラ、テメツ! 何でそれを!？」

「ツラじゃない桂だ。リーダーから聞いたぞ。前はカレーを零した結果、カレー臭が消えなくなって買い替えたらしいな。」

「神楽の奴、黙っとけって言ったのに!」

「おい…」

「あ？」

土方が硬い表情で銀時の肩を掴んでいた。銀時も無表情で土方を見返した。

「テメエ 桂とどういう関係だ？」

「何？土方君。俺には聞かないんじゃないの？」

「ただの顔見知り程度の関係だ。」

「！」

銀時は驚いて桂を見た。その桂はというと、特に銀時に目をやるでもなく言った。

「そんなことより良いのか？貴様ら真選組が日夜追っている桂小太郎が、こんなに近くにいても関わらず捕まえようともしない。こんなことでは真選組の名が廢るな。」

ただでさえしゃあしゃあとした態度で真選組を出し抜く桂に、銀時と同じことを言われて余計に腹が立ったのか、土方は刀を抜いて果然と立ち尽くす隊士達に指示を出した。

「おい！！テメエらいつまでぼけっとしてるつもりだ！！さっさと桂捕まえろ！！」

土方に怒鳴られて、隊士達は我に返った。

「そつ、そつだ！！桂を捕まえるオオオ！！」

「桂アア！！大人しく捕まれエエエ！！」

隊士達が追つて来たのに合わせるように、桂はいつの間にか来ていたエリザベスと共に走って行ってしまった。土方はチラッと銀時を一瞥すると、桂を追って去っていった。銀時は頭をボリボリ掻きながらそれを見送ると、深くため息をついた。

「何だよ、ツラの奴」

考えなくともわかった。土方に追及された銀時を、桂は庇ったのだ。しかし、何故なのだろう？銀時は、たとえ真選組に自分が過去に攘夷戦争に参加していたことが知れ渡ろうと、そんなことはどうでもいいと思っている。だが、桂は恐らく銀時の考えを知った上で、このような行動を取った。銀時にはその理由がわからなかった。

「銀さん！」

銀時が考え込んでいると、突然銀時を呼ぶ声がした。前を向くと、新八と神楽が駆け寄って来るのが見えた。銀時の前に立ち止まって、新八が言った。

「桂さんに助けてもらっちゃったみたいですね。」

「別に庇う必要なんてなかったんだけどな。」

「まあまあ、良いじゃないですか！」

「そついや銀ちゃん、またそれ買い直しアルな。」

神樂が銀時の手にある真つ二つに折れた木刀を指差した。それを見た銀時は、思い出したように神樂の頭を殴り付けた。

「あつ、そうだ！神樂テメエ、ツラに余計なこと言ってるじゃねーよ！」

ゴッ！

「 ったあ！何するネ！」

「 テメーが悪いんだろ！？ 」

「 あの、何の話ですか？ 」

「 別に何でもねーよ！祭も騒動のせいでシラけたし、もう帰るぞ！ ったく、結局無駄な体力使って終わっちゃったぜ 」

ブツブツと文句を言いながら歩いていく銀時の後に、新八と神樂は急いで続いた。

某船内。

「 思ったほど持たなかったな。 」

勝が少々渋い顔をして言った。しかし、高杉は鼻で笑った。

「 実験台の器が小さかったただけだろう。万斉、もっと上等な奴を連れて来い。 」

「 わかってるでござる。やはり、ある程度の者は所詮ある程度止ま

りだったでござるな」

万斎が出て行った後、すぐに勝も立ち上がった。高杉は勝に視線を移すことなく月を見ている。

「もう行くのか、とは聞かないのだろうか。」

「フン 俺はお前がどこで何しようと思っただけ。たとえ俺達鬼兵隊と手を組んでも、表向きのお前の立場は幕府の人間だからな。」

「まあ、確かにそうだ。では俺は行く。じゃあな。」

勝が別れを告げても、高杉は何も言わなかった。勝はそんな高杉を見て小さく笑うと、特別急ぐこともなく歩いて出て行った。

第十六訓 パソコンばかり弄っていると漢字の書き順がわからなくなったりする

特別変な夢を見ることもなく、普通に目を覚ました銀時の目に映ったのは、いつもの天井。銀時はゆっくりと身体を起こしてみる。部屋の中はしんと静まっついていて、外の雀の鳴き声がよく聞こえた。何も変わつたところがない、ごく普通の朝。それが銀時にとっては不思議で仕方がなかった。きっと、あの小包が届いてから全くと言っていいほど平和ではなかったからだろう。

「そのうちまた襲撃でもされんじゃねーか?…ねーな、そんなの。ナイナイ。」

立て続けにそんな非平凡なこと、起こるはずない。そう、油断していたのかもしれない。

銀時はこの後すぐに思い知ることになる。少なくとも自分の周りには“平和”なんてないということ。…

「あつ、銀さんおはようございます。」

着替えた銀時が寝室から出ると、新八がソファに座っていた。

「おー、新八い。つーか、いつもより来るの早くね?」

「ええ。何だかいつもより早くに目が覚めちゃって。それで来たんですけど、神楽ちゃんをもう起こすのはかわいそうだなって思ったんで、朝ご飯作ってからずっと座ってたんですよ。ていうか、今日は銀さんも早いですね。」

言われてみればそうだ。こんなに早い内に起きたのは久しぶりだと思っ。

「俺も何でか目が覚めちまったんだよ。チツ、もう少し寝ときゃよかつたぜ。」

「まあいいじゃないですか。こんなに平和的なので、久しぶりでしょ？」

新八にそう言われて、銀時は漠然とこれまでの出来事を振り返って見た。

「元はと言えば、あの小包が届いてから面倒なことになったんだよなあ。突然リンチされかけるわ、真選組に目はつけられるわ…って、何コレ？これまでのあらすじ的な？これで文字数稼ごうってか。そんなの通用する訳ねーだろ。漫画でもアニメでもないんだよ？これは。何でも適当にあらすじやっときゃ良いつてモンじゃねーんだよ。この世界はそんなに優しくないからね！もっと厳しいモンだからね！！！」

「銀さん、急に現実的なこと言わなくて良いですから。つーか今のすごい文字数いきましたよね！？わざとってバレバレですよ！？」

「おい！！テメーらさつきからうるさいネ！！レディーの睡眠の妨げアル！！！」

神楽が目を吊り上げて食ってかかって来たが、銀時はそれを軽くあしらった。

「うるせーのはお前も一緒だろーが。布団から出たんならさっさと着替えるバカ。」

ベシッ！

銀時に頭を叩かれて、神楽は渋々と洗面所の方へ行つた。「どーせ今日も暇だし、最近糖分足りねーし。新八い、お前何か奢れよ。」

「はあ！？何で僕が銀さんに奢らなきゃならないんですか！？僕だつて人に奢れるほどのお金なんて持ってません！！大体、大の大人が未成年に奢れつて言うこと自体おかしいですよ！！」

「いいじゃねーか！！万年金欠の俺よりも持つてるだろ！？」

ジリリリリ！！

くだらない言い争いをしていると、突然電話が鳴つた。新八がさかさ言つ。

「ほらほら、早く出た方が良いですよ！仕事の依頼かもしれませんね！」

「チッ…勝ち誇つたようなツラしやがつて」

銀時は舌を打ちつつ受話器を取つた。

「もしもし？」

『あ 万事屋さんですか？』

電話の向こうの声は、女のもののよつに聞こえた。蚊の鳴くような小さくて聞き取りづらい。とりあえず銀時は一つ返事で返す。

「そーですけど。」

『ホントに？良かった…。あの、今すぐ来て欲しいんです！場所は広場で、かなり急いでるんです！よろしくお願いします！』

ブツツ！

相手は慌てた様子だったが、やはり小さな声で言ってきた。しかし、誰もが皆頷くほど身勝手な依頼人だと、銀時は思った。何せ自分が言いたいことだけ言って、相手の返事も聞かずに切ってしまうのだから。一方的に切られて話す相手がいなくなつた銀時は、受話器を元に戻して眉をひそめた。新八は不思議に思つて銀時に話しかけた。

「どうしたんですか？電話、誰からだつたんですか？」

「今すぐ広場に来てくれつてよ。名乗りもしないで何言つてんだつて感じだぜ。まあ、電話してきたのは女だつたつてこたあわかつたんだけどな。」

「そいつ、怪しいアルな。銀ちゃん行くアルか？」

着替え終えたららしい神楽が会話に入ってきた。確かに神楽の言う通り怪しいし、危険も伴うかもしれない。

「どうするんですか？」

銀時はしばらく考えるように黙り込んでいたが、やがて口を開いた。

「行くか。もし依頼だったら、金ヅル逃す訳にもいかねーし。」

「でも木刀はどうするアルか？まだ届いうぎゅ！」

何か言いかけた神楽の頬を片手で潰し、銀時は新八を見た。

「万が一俺が襲われたら大変だからな。お前の木刀貸せよ。」

「別にいいですけど。」

新八に手渡された木刀を腰に挿した銀時は、窓の方に目をやってからさっさと玄関に向かった。新八と神楽が後を追うと、振り返って二人を止めた。

「悪いが、ちょっと急用が出来たみてーだ。先に行って待ってる。」

そう言い残して、銀時はヒラッと手を振って出て行った。

「定春うー。散歩の時間ヨー。」

「銀さん、急用って何だろう？さっきまで暇だってあんなにうるさかったのに。」

「さあな。別にどーでもいいアル。あんな天パのことなんて放っておくヨロシ。」

「わんっ！」

本当にどうでもよさそうに神楽が耳をほじりながら言った。それに同調するかのようにな定春が吠えた。

第十七訓 黒猫を見たら不幸になるって言うけど見る前から既に不幸だったら聞

銀時は万事屋の前に立っていた、笠をかぶった男のすぐ横に立った。

「何か用かよ、ツラ。」

桂は少し笠をあげて、銀時と視線を合わせた。

「ツラじゃない桂だ。ここでは話しづらい。場所を変えるぞ。」

二人は人気のない路地裏まで来た。いつまでも話し出そうとしない桂に、痺れを切らした銀時は怒鳴った。

「おい、ツラ！いい加減早く言えよ！俺アお前が思ってるほど暇じゃねーんだよ！つーか、そもそも何でよりによって窓から入って来ようとするんだよ！？普通にインターホン鳴らせばいいだろーが！！」

「ツラじゃない桂だ。もし真選組に見られたらまた面倒が起こるだろう。今だってどこで誰が見ているのかわからんのだ。」

「テレビ局引き連れてインターホン鳴らしてきた奴の台詞とは思えねーなア！！」

ジトツとした目で睨みつけた銀時に、桂はフンツと鼻を鳴らした。

「今お前に動きづらくなされると、俺が困るのだ。」

「どづという意味だよ？」

銀時が尋ねると、桂の表情が急に厳しいものに変わり、声のトーンも低くなった。

「銀時、祭の時に暴れていた男を覚えているか？」

「あんなインパクトの強エモン、忘れる方がおかしいだろ。」

「俺はあの後、奴が振り回していた刀の出所を調べたのだ。」

銀時は男が握っていた刀の、あの不気味な輝きを思い出していた。

「で？結局わかったのかよ？」

桂の眉間の皺が、ますます深くなる。そして告げられた名前に、銀時は目を見開いた。

「高杉が 鬼兵隊がまた動き出した。勿論奴らと手を組んでいる春雨もだ。」

「高杉のヤローか……」

「しかも、それだけでは終わらない。高杉はとんでもない者と手を組んでしまった。」

宇宙海賊春雨だけではない。鬼兵隊とまた新たに手を組んだ者がいる。銀時には、桂の口から出る前からわかってしまったような気がした。

「おいヅラ もしかして、そいつの名前……」

「？」

「勝川舟、じゃねーか？今は幕府でキャリアの。」

「！どうしてそれを！？」

銀時の口からその名前が出てくるとは思っていなかったのだろう。桂の顔は驚きに満ちていた。銀時は先日襲撃されたこと、襲つてきた男達が勝川舟の手下だと名乗ったこと、勝が銀時を必要としているらしいことを話した。

「そんなことが…。しかし、まさか奴の名を再び聞くことになるのはな。俺の部下から聞いた時は本当に驚いた。」

「俺なんて最初、アイツのことなんか思い出せなかったぜ。」

「つくづく記憶力のない男だな、貴様は。糖分ばかり取るからこうなってしまうのだ。」

「悪かったな！！記憶力なくてよ！！つか、糖分と記憶力は関係ねーだろ！？糖分バカにすんじゃねえ！！」キレル銀時を無視し、桂は何かを考え込んでいる。

「何だよ、ツラ。」

「ツラじゃない桂だ。一つ疑問があるのだが、どうして勝は今更お前を必要としてるんだ？そもそも幕府の人間がするような行動ではない。春雨はともかく、高杉等とも繋がりを持っているとは。勝は一体何を考えているのだ？」

悩む桂を見た銀時は、大きいため息をついた。

「そんなこと俺が一番聞きてえよ。もう面倒事に巻き込まれんのは御免なんだ。なのにといつもこいつも」

「むっ、何故俺を睨む？俺がいつお前を巻き込んだと言っただけ？」

「忘れたとは言わせねえ！！元はといえばテメエのせいで真選組に目エつけられるわ、海賊敵に回すわ！つたくどーしてくれんだよ！？」

「何を申すか！！確かに貴様が真選組に目をつけられるきつかけを作ってしまったのは俺かもしれん！！だが、春雨を敵に回したのは他でもない、貴様自身だろう！！大体俺はそれで借りを返したはずだ！！寧ろ俺が巻き添えを喰らったようなものに、今更自分の良いように作り替える気が！？」

「俺別に悪くないもんね！！お前が勝手に『今から俺がお前の左腕だ』とか言っただけだもんね！！つーかテメエこそ自分の良いように作り替えてんじゃねーか！！」

桂と怒鳴り合った銀時は、肩で息をしながら今まで大事なことを忘れていたのに気が付いた。

「俺はテメーとくだらねエ言い争いしてる程暇じゃねーんだよ。新八達待たせてんだ。」

「何かあるのか？」

「今朝電話がかかってきてよ。今すぐ広場に来てくれって、女の声

で。」

銀時が言うと、桂の眉がピクツと動いた。

「名乗りはしなかったのか？」

「あ？ああ。一方的に用件言って切りやがった。」

「銀時…そいつは早く行った方が良い。」

「？何でだよ？」

「言っただろう！！今どこで誰が見ているかわからんと！！奴らはきつと見ていたのだ！！俺がお前のところに来ていたのを！！そして予測した！！適当な話をつけてお前らを外に出せば、必然的に俺とお前は会い、お前はリーダー達を先に行かせることも！！現にお前はその通りにリーダー達と離れた！！それが奴らの狙いだっただ！！リーダー達が危ない！！」

その言葉を聞いた途端、銀時の身体は勝手に動いていた。

『てめーにゃ誰かを護るなんてできっこねーんだ』

『今まで一度だって大切なもんを護りきれたことがあったか？』

いつかの夢で聞いた言葉が聞こえた気がした。銀時はそれらを無理矢理振り払い、無我夢中で走った。

## 第十八訓 どんなにバカな奴でも風邪は引く

「新ハイ、どこにいるアルか？その女。」

「そんなこと僕知らないよ。電話に出たの銀さんだし。」

「ったく、ホントに使えねーメガネだな！」

「何それ！？それだけで使えないとか言われんの！？」

新八と神楽は人混みの中をさ迷っていた。たくさん人はいるが、該当する人物には見えない。神楽が酢昆布をかじりながら頬を膨らませた。

「もう私帰りたいヨ！！定春にご飯あげなきゃいけないし！」

「神楽ちゃん、いつも自分であげないじゃないか。」

「今日はあげるネ！」

新八は頭に手をやりため息をついた。

「都合が悪い時だけそうやって……」

「新八！アイツじゃないアルか！？」

興奮気味の神楽が指差す先には、一人の女が誰かを探すような素振りをしている。どうやら天人のようだ。

「天人も人間に依頼とかするんだ…。」

「そんなことどーでもいいから、さっさと行けよダメガネ。」

「うるさいよ！あのっ、すみません！」

新八の声に気付いた女が、こちらを見た。新八はすぐさま駆け寄って女に尋ねる。

「さっき万事屋に電話、しませんでしたか？」

「ああ コイツらか…」

「え？」

「あ、いいえ。確かにお電話させていただきました。ちょっと頼みたいことがあるの。」

「僕らに可能なことなら何でもやりますよ。」

女はうふっと笑った。

「簡単よ。でも、確証がある訳じゃないし、最後にきちんと確認しておかないと。」

「何をですか？」

「あなた達、万事屋ってことは銀髪のお待さんの仲間よね？」

突然の質問に新八は戸惑った。銀髪の侍って、銀さんのことだよ

な？でも、どうして天人が？  
疑問に思いつつも新八は答えた。

「そうですけど…」

「あら、そう！じゃあ…」

と、女の身体が突如大きくなり、ブチブチと音を立てて服が破れた。細かった腕はあつと言う間に筋肉質に変わり、新八と同じくらいだった背丈は軽く3メートルを超えていそうな程高くなった。そして先程までの繊細な笑顔は無く、鋭く血走った目が新八を捉えていた。

「お前らには人質になってもらう。」

地の底から響いてくるような、男の声。黒装束で、自分と大して変わらない大きさの金棒を肩に担いだ大男の天人。新八は思わず小さく悲鳴を上げそうになった。不意に神楽が定春に飛び乗り、新八の腕を掴んだ。

「かつ、神楽ちゃん！？」

「逃げるアル！」

「遅い。」

男の声が近くでした。定春が跳び、新八の腕を掴んでいた神楽の手が離れる。大きな影が新八の頭上に現れ、男が高々と金棒を振り上げていた。

「安心しろ。殺しはしない。ただ餌になってもらうだけだ。白夜叉

をおびき出す為のな ！」

ヤバい…！本能的に思った。しかし、身体は言うことを聞かず、その場にへたり込むことも出来ないまま立ち尽くす状態になっている。世界がスローモーションのようにゆっくりと動いて見えた。自分と同じように動けないで見ているだけの人のだろつか、誰かの悲鳴が遠くで聞こえた。振り下ろされる直前、新八の頭に銀髪の男が浮かんだ。

銀さんっ ！！

神楽は走ったが、もう時は既に遅し。

「しっ 新八イイイ！！！」

ガアアアアン！！！！

神楽が叫ぶも虚しく、凄まじい轟音と共に掻き消された。

## 第十九訓 天は運の良い奴に二物も三物も与える

砂埃が突風と共に舞い、何も見えなくなる。その場にいた誰もが終わったと思った。勿論、新八自身も。

「むづつ…!」

天人の驚愕の呻きで、新八は我に返った。あ、れ？死んでない…というより何も当たらなかった。思わず上を振り仰ぐと、そこには新八が求めていた銀髪の侍が天人の金棒を受け止めていた。

「ぎつ、銀さん…!」

「大丈夫か？新八。ここから離れてろ。」

銀時の登場に安堵したからか、先程は動かなかった身体は、実に自然に動いた。銀時は新八が離れたのを確認すると、天人に向き直った。

「オイオイ、こんな街中でそんな物騒なモン振り回すなんざ危ねーなあ。」

ギリギリと木刀が金棒を押しさえ付ける音が鳴る。想像以上の力の強さに、男はニヤリと笑った。まだ、その表情には余裕が伺えた。

「フン…それは貴様も変わらぬだろう。まさかこんなにも早く来るとは予測出来なかったぞ、白夜叉。」

「その名前はもう聞き飽きたぜ。テメエ、勝の手下か？」

「いかにも。勝様は貴様が必要らしい。生かして連れて来いとおっしゃった。」

「何で今更俺なんだよ？テメーら幕府の人間が高杉と手工組んで何しようとしてんのかは知らねーが、もう俺アテメーらと遊んでる暇なんてねーんだよ。」

「ほう、短時間で随分と調べ上げたようだな。大したものだ。だが」

木刀と金棒が音を立てて離れる。

「少々喋り過ぎたようだ！」言葉と同時に男は集中的に攻撃を仕掛けてきた。銀時はそれらを次々とかわしていく。

「くっ…！ちよこまかちよこまかと！」

「オイ。」

自分の金棒が空を切り、自棄になっていた男は、背後の影に気が付かなかった。

「どこ見てんだよ。」

後ろから聞こえた声に、驚きの面持ちで振り返る。その眼に空中で構える銀時の姿が映った。

「なっ…！？」

「テムエらは新八達を人質にして俺を従わせるつもりだったんだろ  
うが、そいつは逆効果だ。」

男の頬を、冷たい汗が伝って落ちた。何だ、一体 この男から発せ  
られているこの威圧感は…

「俺の大事なモンに手エ出して、タダで済むと思うなよ？次その汚  
ねエ手で指一本でも触れてみる。幕府だろーが海賊だろーが関係ね  
エ。俺アテムーら全員…」

視線が絡み合った途端、天人は完全に動けなくなっていた。その顔  
には、もう余裕などというものは欠片もない。気圧されたのだ。眼  
と眼が合った瞬間ダイレクトに伝わってきた、殺気に。

「喰い潰しに行くからな。」

ヒュッ

銀時の木刀が風を切る音がした。そして

ドオオオン…

天人の巨体が傾き、大きな音を立てて倒れた。割れた額からは血が  
噴き出し、白目を剥いて気絶している。

銀時はその顔を静かに見つめていた。偶然にも、ざわつく見物人達  
の声が聞こえた。

「あんなに大きな天人を倒しちゃうなんて、あの人強いわね！」

「ああ！一体何者なんだ？」

「何だあ？オメーら、知らねエのか？あの男、かぶき町四天王のお登勢のところにいる用心棒さ。」

「聞いたことあるぜ！何でも、四天王の四大勢力を一人で渡り歩いたとか！」

「へええ スゲエな！」

そこまで聞いたところで、新八と神楽が走って来た。

「何だか銀さん、すっかり有名な人ですね！」

「私も有名になりたいアル！」

キラキラと輝くような笑顔。それを見ながら銀時は、何が何でも護り通そうと思った。

「けるぞ。」

銀時は努めていつもの調子で言った。ちよつとでも油断すれば、この二人は察してしまうだろう。今はまだ知らなくて良い。いや、これから知らないままで良いのだ。もしも知って傷付くことになつてしまったら、また後悔することになる。だから、余計なことは伝えない。頼らず護ってみせる。

今度こそ、本当の意味で大切なものを護れるように

今度こそ、本当の意味で己の魂を護れるように …



## 第二十訓 病気になるかならないかは気の持ちよう

### 某料亭

「勝殿。今回の計画、まだ白夜叉を出すところではありません。何故か貴方は執拗にあの男に固執なさる…。今はあの人と接触させるべきではないのは、あの人の近くにいたことのある貴方だからこそわかつてはいるはずですが。」

料亭の一番奥、幕府官僚とその関係者のみが入ることを許される客室 要はVIPルームだ。そこで向かい合う二つの影。その内の一つ：武市変平太は普段と変わらぬ表情で、しかし、その声に少々自分の計画に反することをされたことに對する怒りを含ませて、真向かいのもう一つの影の主：勝川舟に言った。  
その勝は、特にたじろくことも無く、猪口に注がれた酒を煽る。

「私は高杉とアイツを接触させるためにやったつもりはありませんよ。」

意外な答えに、武市は微かに眉を動かした。

「貴方の考えは全く読めませんね。じゃあ、一体何が目的だったのですか？」

勝はフツと笑う。

「私としては武市殿の方が読めませんよ。」

息を一つつくと言った。

「まあ、強いて言うなら思い出させたかった、といったところですか。」

益々眉をひそめる武市を尻目に、勝は夜の闇に臙げに浮かぶ月を眺めながら再び猪口に口を付けた。古い紙の臭いが漂う、真選組資料室。沖田は鼻をつまみながらある資料を探していた。

「ったくあのニコチン野郎、面倒くせーこと押し付けやがって…」

沖田がここに来たのは他でも無い。土方の指示だった。

『総悟デメエ、たまには働け。』

土方は煙草の煙を吐き出しながらそう言った。しかし、沖田にはそれが上辺だけの理由だとわかっていた。土方は気付いていたのだ。沖田が銀時を疑い、調べるのに抵抗を感じていることを。

あまり納得のいかなかった沖田は、資料室に行く前に近藤の所へ向かった。

「ん？どうした総悟。」

「近藤さん、俺アやっぱり土方さんのやり方は気に入くわねエ。」

「何があつたんだ？」

優しく尋ねてくる近藤に、沖田は一部始終を話した。

「…大体、あの旦那が白夜叉なんて伝説上の侍だつて疑うんですぜ？おかしくありませんか？」

近藤は沖田の話を実剣な表情で聞いていたが、やがて口を開いた。

「まあ確かに、ただ万事屋が通った後に落ちていた脅迫状と風の噂だけで奴に疑いをかけるのは、俺もちょっと早まっているとは思うけどな、総悟。お前が今回の件についてそう思っているように、トシにも何か思うものがあるんだろう。俺はどうにもバカで剣を振るうことしか能が無い。だが、アイツは頭も切れる。とりあえず奴の意見に従うしかないだろう。」

「……。」

眉間に皺を寄せる沖田を見て、近藤は笑った。

「やはり納得いかんか。そうだろうなあ。お前らは昔からそんな感じだったしな。でもなあ、手がかりも何も無い今、とにかく何でもいから少しでもある可能性を調べない訳にはいかねーんだ。それはお前にもわかってるだろう？」

近藤にそんなことを言われてしまったのは、もう何も言えない。近藤の部屋を後にした沖田は、渋谷資料室に来たという訳だ。沖田は資料の背表紙を、順番に目で追っていく。

「攘夷、攘夷つとあ。」

目的のものを見つけるとすかさず手に取った。そこには『攘夷戦争資料』と書かれている。ページをパラパラとめくり、ある所で手を止めた。

現在把握されている攘夷戦争参加者一覧

桂 小太郎…

高杉 晋助…

…

現在情報把握不可能な攘夷戦争参加者

白夜叉

思わずため息が漏れた。やはり資料室の情報は当てに出来るものは無かった。

「仕方ねエ 外に行くしかねエな。」

沖田は大きな欠伸を一つすると、資料室を出て行った。

## 第二十一訓 地球上で最終的に生物の頂点に立つのはイカ

土方は煙草に火を付けながら近藤との会話を思い出していた。

「何か用か？近藤さん。」

近藤に呼ばれて部屋まで来た土方は、新しい情報か別の仕事の用件かと思っていた。しかし、近藤の表情は仕事の時のように硬くなく、普段のような穏やかなものだった。

「トシ、お前もなかなか酷だなあ。わかってて総悟にあんなことさせるなんてよ。」

「あんなこと？」

「万事屋を調べさせてることだよ。」

それを聞いた土方は、思いきり顔をしかめた。どうせ沖田のことだろう。自分のやり方が気に入らなくて、近藤に愚痴を零したに違いない。

「当然のことだろ？俺たちや真選組だけ？攘夷志士を潰すのが俺達の仕事だ。そんな甘っちょろい考えだけでデカイ手がかりみすみす逃してたまるか。総悟が何を言ったか知らねエが、奴には少なからず桂との繋がりもあるんだ。調べねエ訳にはいかねーよ。」

近藤は土方の言い分を静かに聞いていた。聞き終えた後もしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「確かに、お前の意見にも一理ある。俺達は真選組だ。攘夷思想を無くすのも仕事だし、少しでも疑いのある万事屋ヤロを調べるのもわかる。でもな、トシ。これは俺の勝手な想像だが、お前は何だか目先のことに焦りすぎてる気がするんだよ。」

「どついつ意味だ?」

「まあ、待て。俺からも一つ質問させてくれ。もし、万事屋が本当に攘夷志士だったとしよう。その時お前は、絶対に躊躇チウジウわないで奴をすぐに斬れるか?」

「……ツ当たり前だ!それが俺の仕事だからな。」

土方は驚いていた。近藤の問い掛けにすぐに答えられなかった、自分自身に。近藤は戸惑う土方を見た途端に大声で笑った。

「ッ何がおかしいんだよ!??」

「ガツハツハ!いや、すまんナトシ!まさかそんなに動揺するとは思ってなかったもんでな!」

「……」

「ホントに悪かったって!俺もお前を笑えた義理じゃねーのにな!」

「は?」

豪快に笑いながら近藤が言った言葉の意味がわからず、土方は思わず聞き返した。近藤は土方の心情を察したのか、困ったような笑み

を浮かべた。

「総悟に言われた後、考えてみたんだよ。もし万事屋が本当に今でも攘夷活動をしていることがわかったら、俺は奴を斬れるかってな。」

「で？どうなんだ？」

「答えは 多分、ノーだ。」

「…！」

意外な近藤の答えに、土方は目を見開いた。

「ハハハ！そんなに驚くことも無いだろう？まあ、気付かねー内にその辺の輩みてーに簡単に斬れるような関係じゃなくなってたってことなんだろうな。こういうのが“腐れ縁”ってやつか。切っても切れねー、面倒くせエモンだよ。トシ、お前はこんな俺を局長失格と思うかもしれんが、俺はそういうのを切れる程の知恵も勇気もねーんだ。大事にしたいモンの中に入っちゃってるんだよ。」

先程は驚いたが、考えてみれば近藤らしい答えだった。

「近藤さんよオ、アンタ、ホントに底無しのお人よしだな。」

「そうかもしれん。俺みたいなの奴はやっぱり真選組局長には向いてないのかもな。」

「んなこたあねエよ。俺達はそんなアンタだからこそ、今までアンタに付いて来たんだ。」

「……そうか。すまん、トシ。こんなくだらねーこと言ったために呼び出して。」

「別に構やしねーよ。むしろ礼を言っぜ。ありがとな。」

「！」

それ以上は何も言わずに、土方は部屋から出た。正直面食らったし、今でも戸惑っている自分がいる。

「ま、ゆっくり考えてみるか……」

土方は吸った煙を宙に向かって一気に吐き出した。

## 第二十二訓 友人の誕生日くらいは忘れずに

新八はかなり気まずく思っていた。あの騒ぎの後の帰り道から今まで、誰一人として喋ろうとしない。酢昆布を無心に頬張っている神楽はともかく、銀時の様子がどうもおかしい。どこか上の空というか、心ここに在らずというか、とにかく普段の銀時ではなかった。

「あ、あの、銀さん？」

「……」

「銀さん？」

「……」

「銀さん。」

「……」

「ぎーんさーん。」

「……」

何度呼んでもどう呼んでも反応は無い。そんな様子を見ていたのか、神楽が新八に耳打ちしてきた。

「呼んで反応しないなら、この際殴ってみるヨロシ！」

「えっ！？でも後が怖いよ……」

「何でそうやってすぐに怖じけづくアルか！？お前はたとえ地味でも一応男ネ！それくらいの勇氣も必要ヨ！」

「地味は余計だよ！でも 確かにたまにはそういう勇氣も必要だよ。僕だって男なんだし！よしっ！いい加減に 返事しろっ！！」

ポコッ！

新八の拳は見事に銀時の顔に命中…したかと思いきや、先程まで上の空だったはずの銀時の左手の中に入っていた。

「新八、テメエ 地味ダメガネの分際で、仮にも雇い主の俺を殴ろうとするたあ、いい度胸じゃねーか…」

下を向いているために、銀時の表情は隠れていて見えない。けれど、銀時から発せられる怒気を新八ははっきりと感じ取っていた。

「いつ、いや、あの、銀さんっ！こっ、これには訳があっ！ちよっ、神楽ちゃん！酢昆布は良いから何か言ってよ！」

「いやー、この結果があまりにも予想通り過ぎてぐうの音も出ないアルよ。また子のパンツよりも丸見えの結果ネ。」

涼しい表情でしゃあしゃあと言う神楽にキレる余裕も無く、新八は銀時にボコられたという。「ツクシユン！」

「どうしました？また子さん。あなたのような猪娘でも風邪を引くんですかねえ？」

「誰が猪娘っスかアアア！！先輩撃ち殺されたいんスか！？いや、誰かが私の噂をしてるような気がしてならないんスよ。」

また子は辺りをキョロキョロと見回す動作をした。

「何も気にする必要ありませんよ。貴女の噂なんて、どうせ良からぬ」

ドンッ！

「失礼にも程があるっスよ武市先輩イイイ！！次言ったらその脳天ぶち抜くっスからね！！」

「人に銃を向けるなんて危ないですなまた子さん。全く、何故晋助殿はこんなに凶暴な猪女を鬼兵隊に入れたのやら。もっとこう、可愛らしい 例えばロリ」

ドオン！ドオン！

「大江戸青少年健全育成条例改正案賛成イイイイ！！！！」

「仲間割れはいけないでござるよ。」

「あつ、万斉先輩！だってこのロリコン武市変態がつ！！」

「変態ではなく先輩です。ちなみにロリコンじゃないフェミニニストです。それに大江戸青少年健全育成条例改正案など消えるべきものに賛成するのは聞き捨てなりませんね。」

「何言つてんスカ武市先輩。アンタみたいな変態を撲滅するために  
も、これはかなり必要っスよ失せる変態。」

「私は変態じゃないってさっきから言ってるのがわからないんです  
かお前が失せる。」

睨み合う武市とまた子に、万斉は気にせず言った。

「そろそろ拙者らも仕事でござるよ。」

「！」

「ああ、そうでしたね。」

「よっしやアアア！！燃えるっス！！」

また子はクルツと拳銃を回してニヤリと笑った。万斉も三味線を短  
く鳴らした。

「皆さんやる気ですね。結構なことです。ところでまた子さん、さ  
つき“萌える”って」

「言っていないっスよ。アンタの漢字変換が間違ってるだけっス。つ  
ーか空気読め変態イイイ！！」

ドオオン！！

今までで一番大きな銃声が鳴り響いた。

第二十三訓 赤い財布は金が減るのが早いって言うけど実際どんな色の財布で

朝早くから万事屋の前で声を張り上げる男が一人。

「旦那ア、いるんだろイ？さっさと出て来てくだせエ。」

人を気遣うことなくドンドンと扉を叩いているのは、真選組一番隊隊長の沖田総悟である。銀時はこの激しい音で目を覚ました。

「まったく、うるせーな！…今何時だと思ってんだよアイツ…」

「旦那ア、アンタがこれ以上居留守使おうってんなら、こっちにも策がありやすぜ。」

「あ？策？」

ガチャツ！

その小さな音には聞き覚えがあった。そのの正体がわかった途端、銀時は冷や汗をかきながら大声を上げた。

「まつ、待つてよ沖田君！ちよつ、それまさかつ！そんなことしないよね！？」

「俺が10数える間に開けてくだせエ。でないとこの家ぶつ飛びますぜ？10、9、8、7」

「だアア！！もうわかったから！開けるから！だからそんな物騒なモンはしまいやがれ！！」

ガチャリと銀時は鍵を開ける。

「ほら、これで良いんだろ？扉くらいは自分で開けてくれや。」

「さすが旦那。どっかのドケチ煙野郎とは大違いでさア。じゃ、遠慮なく。」

ガチャツ！

「え？」

ドオオオオン！！！！

パラパラと崩れる音がする。沖田の放ったバズーカは扉を粉碎し、銀時の机の真後ろにある壁にぽっかりと大きな穴を空けた。平然と入ってきた沖田の頭を、銀時はすかさず殴りつけた。

バコツ！

「おいテメ何してくれんだ！！結局バズーカぶっ放しやがって！！10数えるのなんか全然関係ねーじゃねーかよ！！」

「生憎俺ア、ドアまで開けてもらわねエと普通に入らねエ主義なんですア。」

「そんな主義いらねエよ！！つーかどうしてくれんだよコレエエエ！！家のくせに雨風凌げなくなっちまったじゃねーかアアア！！」

流石にバズーカの音で起きたのか、神楽が押し入れから出てきた。

「何の音アルかー？うるさすぎて目が覚めてしまったネ…って、サド…！何でお前が私の家にいるアルか！？さては不法侵入してきたな…！」

「神楽ちゃん、神楽ちゃん、ここ俺ん家。」

「何言ってるんでイ。俺アちゃんとノックして了承を得た上で入ったぜイ。テメーと一緒にすんじゃねーよ。」

「バズーカ撃つていいとは言わなかったけどな。」

「んだとゴルア？やんのかゴルア。」

「俺に喧嘩売るたア、チャイナにはなかなかいい度胸してんじやねーかい。良いぜ？売られた喧嘩は買う義理があるんでねイ。」

「あー、喧嘩するならもつと広いところでやって じゃねエよ…！いい加減にしやがれテメーらアア…！」

ゴチン…！！

堪忍袋の緒が切れた銀時は、神楽と沖田の頭を掴んで、それらを思い切り衝突させた。

「いったアアア…銀ちゃん何するネ…！」

「テメーらが一番悪イんだろーが…！つか、沖田君は一体何しに来たんだよ…！」

ぶつけられた頭をさすりながら、沖田はああ、と一言つぶやいてから言った。

「旦那に伝えといた方が良いと思って来たんでさア。」

「だから何をだよ?。」

「まだ定かじゃねエ噂程度の話なんですがねイ。この江戸に来るらしいんでさア。あの過激派攘夷志士の高杉晋助が。」

「…ッ!？」

その沖田の口から出た名前に、銀時は息を飲んだ。

「高杉が江戸に、ね。」

やはり、今までの騒動は高杉や幕府の人間でありながら再び高杉と手を組んだ勝によって引き起こされたものなのだろうか?もし江戸に来るとして、一体何をやる気なのだろうか?頭の中をいくつもの疑問がぐるぐると回り、銀時は思考がこんがらがるとような感覚を覚えた。

話を理解することが出来ない神楽が、しかなたく沖田を見ると、何やら深く考え込んでいる銀時を眼に不思議な光を湛えて見つめていた。それは何かに対して納得するような、そしてどこか哀しげな、何とも言い表しがたい輝きだった。神楽は沖田に話しかけようかと思っただが言葉が見つからず、結局ただ黙りこくって立っている他無かった。

## 第二十四訓 人間は誰しも薄汚れた部分を持っている

真選組道場。

割と夜が近づいている夕方頃。沈みかけた太陽の光を浴びながら、土方が一人、竹刀を振っている時だった。ザリツと地面を踏む音がして、道場の開けた入り口に影が射した。

「土方さん。」

土方が竹刀を振る手を止め、視線だけに移すと、制服姿の沖田が入り口の柱に寄り掛かっていた。

「手合いしてほしけりや着替える。」

「万事屋の旦那とこに行ってきやした。」

「！」

「試しに話振ってみたんですがねイ、ありや確かに脈アリでさア。」

「そうか…で、お前はそれを俺に言っでどうする気だ？」

「土方さんこそどうするんですかイ？旦那が少なからず桂や高杉と関わりを持つてることがわかった今、アンタは旦那を叩けるんですかねイ？」

「…どういう意味だ？」

「俺ア知ってますぜ？アンタの内にある迷いを。」

「…!？」

思いがけない沖田の言葉に、土方は思わず竹刀を取り落とした。「土方さん、バレてねエと思ったら大間違いですぜ？今のアンタに旦那を斬ることは不可能だ。」

沖田の言葉を不服に思った土方は何かしら言い返そうとしたが、気持ちとは裏腹に返す言葉が浮かばず、口も動かなかった。沖田は二ヤリと口を歪めるだけの笑みを浮かべた。

「返す言葉も見つかりやせんかい？ま、そうでしょうねエ。凶星ですからねイ。」

「総悟、テメエ…!」

「無理して言い返そうとしなくてもいいですぜイ？土方さん。こっちは充分間に合ってるんで。」

小馬鹿にしたような沖田の態度に、土方はますます青筋を立てた。それこそ沖田の思うツボなのはわかってはいるが、キレやすい土方の性質上、どうしても乗らざるを得ないのだ。

土方は、キレた自分を見た沖田が、DSの血を騒がせてさらにおちよくってくると思つて身構えていたが、不意に沖田が真顔になり、土方から視線を外したのを見て驚いた。沖田は土方に視線を戻すとフンと鼻を鳴らした。

「どうしたんですかイ、土方さん？そんなマヌケ面して、もっと弄られたかったんですかイ？アンタがそんなにDMだったとは、流石の俺も気付きやせんでした。」

「誰がドMだ!!」

「まあ、俺も人のこたア言えねーんですがねエ。」

「！総悟、お前…」

「確かに旦那は攘夷に関した何かに関わってるのは明らか 誰がどう見たってわかることさア。斬らなきゃならなくなるかもしれないエ。けど、いまいちやる気が起きねエんだ。あの人とは今まで色んなことやって来た。たくさん巻き込んだし、たくさん巻き込まれた。数え切れねー程借りもある。だからこんな甘っちょろいことが言えるのかもしれないエ。でも、わかつたんでさア。」

淡々と話す沖田の流れるような言葉を、土方は黙って聞いていた。そうする他なかった。

「だからこそ、いざという時は斬らなきゃならねーことが。」

「！」

一度切つてから放たれた言葉が、土方に重く突き刺さった。まさか沖田に気付かされるとは思ってもみなかった。

驚きを隠せないでいる土方の顔を一瞥すると、沖田は黙って寄り掛けていた身体を起こした。

「ま、俺達がお守りを任されたこの世の中は全然優しくねエってことさア。じゃ、俺着替えるんで。」

「総悟。」

沖田がいつものポーカーフェイスで振り返ると、必然的にだが土方と目が合った。もうその瞳に先程までの迷いは無い。

「まさかお前の言葉に気付かされるなんてな。まあ良い…とりあえず礼は行つとく。ありがとな。」

普段からあまり表情を変えず、人の顔も見ない沖田が、満月のように目を丸くさせ、穴の開くほど土方の顔を見たのは恐らくこの時が初めてだろう。

「土方さん、熱でもあるんじゃないですかイ？あ、今何か身震いした。熱があるのはどうやら俺の方らしい。俺大事をとって寝込みまさら。明日もしかしたら仕事出来ないかもしれねーんで、そんな時は有給休暇って近藤さんに言つといてくだせエ。」

「自分で言えやアアア！！つか総悟テメエホントに最悪なくらい自分に忠実だな！！」

「素直なんで、どうしても正直に答えちまうんでさア。傷付けたんなら謝りませ？」

「黙れ！！このドS野郎が！！」

夜の頓所に土方の怒声が響いた。

## 第二十五訓 自動回転ドアは出るタイミングがわかりにくい

夜も更けた江戸の町。ぼんやりとした明かりを燈す提灯を下げた人影が二つ。どうやら民間の警備隊らしい。

「ったくよ。パトロールだか何だか知らねーが、何で俺ら下っ端はこんな夜中まで見回りしなきゃいけないんだ!？」

「まあまあ先輩。俺達はこうでもしないとろくに稼げない身の上なんですから。そんな風に悪態ばっかついてたらまた奥さんに逃げられますよ?今度ばかりは戻って来ちゃくれないうでしよう?」

「うるせエエツ!! テメエは良いよな!! 給料は俺より良いし、女房とも上手くいってるしよ!! 俺だつて頑張ってるのに!! なのにアイツ、何かと俺とお前を比べちゃあ俺にダメ出しばかりしやがって!! 畜生!! もう耐えられねえ!!」

「ならば耐える必要はあるまい。」

「!!?」

いつの間にか彼らの前に現れた一人の男。夜の闇と、目深に被っている傘のせいで顔がはっきりと見えない。思いがけないことに二人はたじろいたが、先輩と呼ばれた方の男が震える手で十手を突き出した。

「なな何だお前! こんな時間に何をしている!」

「何をしているかだと? フン 愚問だな。」

「な」

先輩が言葉を発するか発さないかのところで、傘の人物が動き、音もなく先輩とすれ違った。その手は腰にある刀に掛けられていた。そして…

ブシャアアア!!!

後輩が気付いた時には先輩の身体から血が噴き出していた。ゆっくりと傾いていく先輩の身体。後輩は驚きのあまり言葉を発することが出来なかった。

ザリッ

砂を踏む音を響かせ、傘の人物が後輩の方に向き直った。

「ヒッ…!!」

傘の下からでもわかる、精神を突き刺すような鋭い視線。刀に手を掛けたまま口を開いた。

「貴様もこうなりたいか？」

声を出すことが出来ない後輩は必死にブンブンと首を横に振った。すると傘の人物は刀から手を離して被っていた傘を脱いだ。途端に提灯の明かりにその顔が照らされた。

筋のおつた鼻、長い睫毛に縁取られた深い闇を思わせる黒い瞳。それとは対照的な燃えるように紅くて長い髪。そしてその瞳や髪を十二分に引き立てる白い肌。不思議なことに、顔にも身体にも少し

の血も付着していない。たつた今人を斬った者とは思えない程に妖しく美しかった。傘を取った後も外されることの無い視線に、後輩はその身をすくませた。

「貴様、真選組局長の近藤を知っているか？」

不意に発せられた質問に、怯えきった後輩はすぐに答えることが出来なかった。途端に先程先輩を血に染めた刀が喉元に向けられる。

「俺は気が短いんだ。貴様もあの男のようになりたくなければさっさと答える。」

「ししし知ってる！知ってます！」

「ならばこれを渡しておけ。」

ヒュッ！

自分に向けて何かを投げられ、後輩は思わず目を堅くつぶった。が、痛みは感じられず、恐る恐る薄目を開くと白い封筒が落ちていた。

「それと、こう伝える。『もう時が来た。我々がこの江戸に、幕府に復讐を果たす時が。まもなくこの地は火の海と化す。覚悟しておくがいい。我が名は』」

ゴクッ

乾ききつたはずの口に溜まった唾を思わず飲み込んだ。

「小西来長……」

「ここにしくるながあ？誰だよソイツ。」

普段のだらけた姿勢で薄汚れたソファーに寄り掛かりながら、銀時は聞き慣れない名前に眉をひそめた。向かい側に座っていた桂は、銀時の余りの知識の少なさにため息をついた。

「“紅蓮の突風”小西来長。真つ赤な髪を翻して刀を振るい、その素早くて確な剣捌きはどんな達人も見抜けぬと言われたところからその名が付いた。俺達の先輩に当たる攘夷志士だぞ？全く 銀時、お前は本当に何も知らないのだな。攘夷戦争に参加していた者ならば、普通は誰でも知っているはずなのだが。」

「だから、俺アやれ攘夷だーやれ倒幕だーなんつーことには興味ねーの。んな辛気臭いこと好んでやってる奴のことなんか、いちいち覚えねーよ。つーか、その大西が何だつてんだよ？ワンピースの編集にまでなつたんだぜ？今更こんなメゾン・ド・ペンギン並のへボ漫画、関わりたくもねーだろ。」

「小西だ小西！大じゃない小だ！そもそも貴様俺と話をする気があるのか！？俺と全く話が噛み合っておらんではないか！しかもこんな漫画と一緒にするなど、俺がメゾン・ド・ペンギンのファンであると知りながら侮辱したな！？」

「テメーがメゾン・ド・ペンギンファンだろーがBLEACHファンだろーが関係ねーよー！！」

「銀時貴様アアア！！ジャンプで人気を博しているBLEACHと

並べるなど、どこまでも失礼な奴だな！！BLEACHファンに謝れエエエー！！」

「桂さん、アンタホントにメゾン・ド・ペンギンファンなんですか？つーか二人ともそろそろ終わりにしてください。」

「そうアルよ。さっきからうるさいネ。いい加減黙んねーとチン引きちぎるぞ。」

神楽の言葉に、その場の空気が凍り付く。平然と男の急所をつくような台詞を吐き出す少女を見て、新八はアニメ終了の根元を見たような気がした。

## 第二十六訓 毛は抜いた分だけ多くなる

「で？その小西がなんだっつーんだよ？」

「近く江戸を火の海にするらしい。」

「は？」

桂の言葉に、最初銀時は頭が追いつかなかつた。それは新八も神楽も同じだったようで、頭上にいくつものクエスチョンマークが浮かんでいるかのような状態になっていた。仕舞いには理解出来ない余り、銀時が思いきり桂の髪の毛を引つ張る始末になってしまった。

「いだだだだ！！はっ、離さんか銀時！！」

「るせえ！！ただでさえ鬱陶しい奴が訳のわかんねーことほざきやがって鬱陶しさ倍増じゃねーかコノヤロー！！俺アもう耐えられねー！！テメーの頭に張り付いてるこの鬱陶しいキューティクル剥がさねー限り俺はこの苛立ちを抑えらんねーんだよ！！っーかそもそもこの鬱陶しいって文字自体鬱陶しくて仕方ねー！！何だよこの画数！！多過ぎだろ！！こんな字誰が書けるか！！」

「お前の怒鳴り具合も十分鬱陶しいネ。」

「もう銀さん落ち着いてください！桂さんも、もっと順序よく説明してくれないと話がわかりません！」

新八の言葉に、桂は目をこれ以上ないというくらいに大きく見開いて、握った右手で左手の掌を叩く仕草をした後大声を上げた。

「おお！すまない、説明が足りなかつた」

ゴツ！！

桂が言い終えないうちに鈍い音が響く。勿論銀時が桂を殴った音だ。

「さつきから何をするんだ責様はっ！！？」

「テムエのリアクションが鬱陶しいくらいにオーバーなのがいけねーんだよ！！！」

「何だと！？」

「だから二人ともやめてくださいってば！これじゃあいつまで経っても話が進みませんよ！」

またもや争いを始めようとした銀時達の間にも新八が割って入り、ようやくくくならない喧嘩が終わりを告げた。

昨日の夜中、町の見回りをしていた自警団二名が小西に襲われた後一人が殺害され、小西は生かした方に警察庁長官宛ての脅迫状と見られる文書を残した。その文書には江戸で大規模な放火を行うという内容が書き記されていた…

「というのが表にも出回っている情報だ。」

「あ？まだ何かあんのかよ。」

「ああ。どうやら幕府が規制をかけたらしくてな。ここから先の情報は普通の一般人が知り得ないものだ。」

一般人が知り得ないもの …

つまり、本当は自分達のような人間が知ってはならないことなんだ。こんな場所で聞くことになるなんて。新八は思わずゴクリと喉を鳴らした。

一体どれ程の情報なのかと一同は身構えたが、話を持って来た側の桂がなかなか口を開かない。痺れを切らした神楽が眉間に皺を寄せ、口を尖らせた。

「おいお前！ふざけてんならいい加減にするヨロシ！こっちはそれを聞きたくてずっと待っててやってるネ！嘘ならさっさと帰れヨ！」

「まあまあ、神楽ちゃん。あんまり口外していいことじゃないみたいだしさ。」

新八は神楽を窺めたが、内心では少し怪訝に思っていた。

桂さん、どうしたんだろ？そんなに言いづらいことなのかな？桂さんが危険になるとか？でもそんなに危ないことなら言おうとするはず無いし。まさか本当に嘘？

ぐるぐると考えを巡らせている内に、新八にも桂が疑わしく思えてきた。

が、しかし、銀時の反応は違った。

「新八、神楽、お前ら少し席外してる。」

「えっ!?!」

「何で！？私達も聞きたいヨ銀ちゃん！」

いきなり銀時から放たれた言葉に、新八も神楽も納得が出来なかった。抗議しようとした新八の目の前に、銀時の拳が突き出された。

「うわっ！？いきなり何なんですか！」

と、銀時は拳を裏返して指を開いた。掌の上にはいくらかの小銭が乗っている。

「…え、何ですか？これ」

「見ての通り金だよ。」

「おい天パ！お前私達をこの程度の金で買収しようとしてんのか！？こんなもんで動くと思ってるのかアアン！？」

神楽は顎をしゃくりながら大声を上げたが、言葉とは裏腹に手は間違わずに掌の小銭へと伸びていた。すかさず銀時が手をさつとどかして、神楽の指は小銭をつまむことなく空を切った。

「神楽、お前この金欲しいだろ？」

神楽は一瞬言葉を詰まらせた。

「…っそ、そんなはした金要らないアル！」

「あーそーかよ。じゃあ何にも持たずに出てけ。定春連れて新八ん家でも行ってるよ。あーあー、せつかく酔昆布買わせてやるうと思つたのになあ。要らないっつーんなら仕方ねーよなあ。」

小銭をちらつかせながらわざとらしく銀時は言った。“酢昆布”という単語を聞いた神楽の反応は早かった。すかさず銀時の手から小銭を奪い取り、新八の腕を掴む。

「お、お前がそんだけ言うなら出てってやっても良いアル！定春う、行くヨー！」

「わんっ！」

「え、ちよ、神楽ちゃん！」

新八は納得のいってなさそうな視線を銀時にぶつけたが、銀時は目も合わせようとしなかった。やがて諦めた新八は、渋々万事屋から出て行った。

「すまぬ、銀時」

「謝られる程のことでもねーよ。俺もアイツらには聞かれたくねーからな。世の中には聞かなくていいこともありゃ、巻き込まれなくていいこともあるんだよ……」

銀時は玄関の方に目を向けながら小さく息をついた。

第二十七訓 発売する曜日当たる日が祝日だった場合ジャンプは発売日が土曜

銀時が新八達を追い出していた頃

ストーカー ではなく真選組局長の近藤勲がいつになく緊張した面持ちで向かったのは、真選組の上に立つ男：警察庁長官松平片栗虎の元だった。受付を済ませ、硬い表情のまま長官室の扉を開けたその瞬間。

ドオン！

「ギヤアアア！！いきなり何すんだよとっつあん！！殺す気か！？」

開けるなり飛んできた銃弾をギリギリのところかわし、涙目になりつつも近藤は抗議した。

「何ってオメー、俺達警察は常に緊張を解いちゃならねーの。特に俺みたいになるとどこでだれが狙ってるかわからないだよ。だからいきなり入ってきたオメーを撃ったオジさんは間違ってます。」

「俺ちゃんとアポ取って来たよね！？」

銃口の煙をフツと吹き消しながら平然と言う松平にツッコミを入れつつ近藤は松平に対して少しばかり苛立ちを感じたが、すぐに平静を取り戻した。

「ところでとっつあん、今日は問題の文書を持ってきたんだが」

ドオン！

「何でだアアア！！？」

「近藤オ オメー何でこのクソ忙しい時にそんなカスみてーな脅迫文なんざ持って来やがった？」

「いや、だから小西がとつつぁんに渡せって」

「バツキヤロオオ！！」

ドオン！！ドオン！！

「ええええええ！！？」

またもやぶつ放された拳銃に、近藤は最早訳がわからなかった。そんな近藤に構わず、松平は眉間に皺を寄せて銃口を近藤に向ける。

「オジさんホント、こんなモンの対処してるほど暇じゃねーの。ウチの娘に最近また変な虫が寄り付いてるからしてエ、オジさんそれを退治しに行かにはあならねーの。」

「とつつぁんそれ退治しに行かなきゃいけないモンの順序が違げーよ！娘の男よりまずテロリストが先だろ！！？」

ドオン！！ドオン！！ドオン！！ドオン！！

「ギヤアアアア！！！！何これ！？俺間違ったこと言っていないよね！？なのに何で俺が退治されそうになってんのオオ！！？」

「間違いだらけだア！世の中の父親にとって一番大事なのは江戸の平和より自分の娘なんだよオオオ！娘に危険が迫ってんのに余所様のことなんか構ってられるかアアア！！大体お父さんはあんな奴が彼氏だなんて認めません！！」

「今の言葉、仮にも江戸の平和を守る警察庁の長官が言っていることじゃないだろオオオ！！」

このようなくだらないやり取りがしばらく続き、ようやく終わった頃にはもう空が赤くなっていた。

「で？これがその小西が俺宛てに送ってきやがった脅迫状って奴か？」

「とっつあん…俺ア今日何回も言っただぜ？」

ようやくやる気になったものの、松平は近藤の話を全く聞いていなかったらしい。疲れきったようにため息をついた近藤は、所々制服が破れており、黒く薄汚れていた。最も、先程まで拳銃を乱射して暴れていた松平のせいなのだが。

しかし、松平はそんな近藤を気にも止めることなく脅迫文に目を通し始めた。

「えー、何々？ああ？江戸を火の海にするだあ？頭狂ってんじゃあねーのか？」

「普通に常識のある人ならばテロリストなんざしねえさ。問題はその後だ。」

「後？えーっと…江戸を壊滅されたくないければ、この江戸にはびこる攘夷志士、“狂乱の貴公子”桂小太郎　そして“白夜叉”を差し出せ…って、白夜叉だあ？伝説の攘夷志士差し出せつつってんのか、このテロリストは。」

松平は声でこそ驚いたが、顔は依然として無表情のままだった。

「今日はそれについてとつつぁんに相談しに来たんだ。桂ならまだしも、白夜叉はさすがに無理がある。」

「んなモン、オメー、代わりの奴でも使えば良いんじゃないか？何ならウチの娘をたぶらかしやがったあの野郎を。」

「警察庁長官が一般人を巻き込もうとするなアアア！！」

「オジさんにとって奴アもう一般人なんかじゃねえ。立派な犯罪者だ。」

「何かカツコイイこと言ってるように見えて、実はめちゃくちゃなこと言っちゃってるよこのオッサン！あー　もう良い。今日は帰るぜとつつぁん。また改めて出直して来る。」

一つ大きなため息をつくとき、近藤は扉の方へ向かって歩いていった。

「近藤。」

松平の呼びかけに、その歩みは自然に止まった。

「前にも何度か言ったが、近藤…仕事に私情を挟むんじゃないぞ。俺達が護るのは江戸の平和であって、一個人の身の安全じゃあねー

んだ。忘れるな。」

「……………」

近藤は何も返すことなく長官室を後にした。

第二十八訓 道端で落とし物の一円玉を拾っている人が自分の母親だった時の一

桂からまだ人目に曝さらされていない脅迫文の後半を聞いた銀時は、何も言わずにただ無表情で黙っていた。桂は苦虫でも噛み潰したような険しい表情で吐き捨てた。

「全く卑怯なことをしてくれろ！ 奴らは江戸に住まう人全てを人質に、俺達を引きずり出そうとしている！」

「あ？ 奴ら？ 大西だけじゃねーのか？」

「大西じゃない、小西だ。誰が後ろ盾になっているのかはまだ解らんが、少なくともこのふざけた茶番劇を繰り広げるのは単独では無理だ。」

「勝…」

銀時がぼつりと呟いた名前に、桂は目を大きく見開いた。

「小西は勝の差し金だと言うのか!？」

「いや可能性が無エ訳じゃねーってことだよ。」

「しかし… 奴が必要としているのはお前だけではないのか？」

「確かに襲撃されたのは俺だけだ。でもそれだけで俺一人が標的の一つことにはなんねーだろ。それにあのムカつくプレゼントの説明はどう付けんだよ。」

箱詰めにされた教科書と脅迫状のことを桂は思い返した。そして首を捻る。

「むう…そう言われると何とも言い難い。だが、高杉とは最早袂を分かつ者同士、こうなつてしまつては勝とも同じようなものだ。俺は奴らに協力する気も利用される気も無い。俺は俺自身を裏切ることはしない主義なのでな。」

桂の答えを聞いて、銀時はフンと鼻で笑つた。

「何大層なこと抜かしてやがんだテメーは。つい最近まではお前も破壊だ何だつて喚いてアイツらと同じようなモンだつただろーが。」

「あんな奴らと一緒にされては困る。俺はもう高杉のような過激派ではない。俺に刀を鞘に収める機会を与えてくれた、俺に護るべきものを与えてくれたこの江戸の街を護りたい。そう思っている。銀時、お前はどうか？」

桂の問い掛けに、銀時はしばらく黙っていた。しかし、やがて椅子から立ち上がると口を開いた。

「んなモン決まつてんだろ。俺ア売られた喧嘩はきつちり返す主義だ。名指しともなりや尚更だぜ。」

ニヤリと口元を歪ませて笑う銀時は、桂に攘夷戦争時代のことを思い出させた。少し嬉しそうな顔をしながら、桂も立ち上がった。

「お前ならばそう言うと思つていた。しかし、今回は相手が相手だ。一筋縄では敵うまい。さすがに木刀では…」

「刀ならある。」

「何!？」

銀時は普段神楽が寝ている押し入れの襖を開けた。そして、何やら古びた風呂敷に包まれた、細長い棒のようなものを奥から引きずり出す。桂はその風呂敷に見覚えがあった。

「銀時、それはまさか」

「ああ。久々に触るけどな コイツには。ちょっと手入れさえすりゃ復活するだろ。」

するりと風呂敷を取り去ると、四つの花びらを象ったような鏢の日本刀が姿を現した。

それは銀時がまだ幼い子供だった頃、屍の山で、初めて師に出会った時に貰った刀。攘夷戦争で戦場を共に駆け抜けた相棒でもあった刀だ。「ずっと持っていたのだな。てつきり捨てたものかと思っていたが。」

感心したような桂の口調に、銀時は眉間に皺を寄せた。

「馬鹿言え。教科書捨てちまっても、コイツは捨てねーよ。」

ぶっきらぼうに言いながら銀時は刀を鞘から抜く。シュラツと擦れる音がし、刃が姿を見せた。

窓から差し込む夕日の光を受けて、その切っ先は銀色の輝きを放つ。年月が経っても変わらず鋭く光っている刃は、まるでこの銀髪の侍の魂を象徴しているように桂には思えた。

銀時はしばらく刀を眺めた後、再び鞘に戻してから桂を見た。

「で？これからどーすんだよ？」

「とにかく準備をしなければならんだろう。とは言え、俺は元より、今はお前も真選組には目をつけられている。迂闊に動けない。それに、あまり派手な行動を取れば、リーダー達も気づいて俺達を追って来かねない。やはり動くなら夜中だな。とりあえず、俺は先に下準備を整えておく。出るのはなるべく早い方が良い。手遅れなどという事態になつては元も子もないのでな。」

その後、いくばくか言葉を交わし、桂は去って行った。一人になった銀時は師匠の形見に目を遣った。

「先生 今度は、ちゃんと俺の魂を突き通してみせる。だから、見てくれよ。」

沈みかけた陽の光が、優しく銀時を照らした。

## 第二十九訓 学校の体育教師には必ず生活指導を担当する奴がいる

志村家

縁側の前に寝転んでいる定春が、一つ大きな欠伸をした。

「銀さん、桂さんと一体何を話してるんだろう。どうして僕らには教えてくれないのかな」

客間のちゃぶ台に顎を寄せ、新八は不満げに言った。しかし神樂の方は、ただポリポリと酢昆布をかじっているだけだ。

「あんなチャランポランとろくでなしが話すことなんて高が知れてるネ。いちいち気にする必要ないアル。」

「でも江戸を火の海にするとか、何か物騒なこと言ってたじゃないか！それに、いくらろくでなしって言ったってあの桂さんがわざわざ万事屋を訪ねて来たんだ。気にするなって方が無理だよ！」

「ほらほら、ご飯ですよ。もう新ちゃんたら、あまり熱くなっても仕方ないでしょ？」

「でも、姉上…そうですね。」

笑顔のお妙に、新八は少し納得の行かなさそうな表情をしつつも、渋々と座り直した。

「でも、僕やつぱり気になります。銀さんと桂さんは一体何を話してるのか。どうやら僕らには聞かせたくないみたいだったし…」

新八の態度にイラついたのか、神樂が持っていた酢昆布を床に叩き

付けた。

「ぐだぐだぐだうるさいネ、新ハイ！まるで彼氏の浮気を疑う  
気の小さい女アル！」

「恋も知らない女の子が何言っただアアア！！！」

「童貞のお前に何がわかるアルかアアア！！！」

「なツ それは関係ないだろオオ！？」

ガシヤアアアン！！

大きな音が響き、取っ組み合いの喧嘩を始めようとしていた新八と神楽の動きが止まった。恐る恐る顔を横に向けると、ひっくり返り無惨にも割れた茶碗のかけらが散らばっている。そして、笑顔で薙刀を持って仁王立ちをしたお妙が口を開いた。

「二人とも？いい加減にしないと怒る《殺す》わよ？」

「……！！！」

二人は光の速さでその場に正座した。

「お行儀よく…ね？」

「はい…」

茶碗と一緒にさらに無惨な姿となった卵焼き（ダークマター）を見た新八は、神楽と取っ組み合いの喧嘩をしようとしなくても寿命がなくなる寸前だった事実気づき、冷や汗をかきながらも内心胸を

撫で下ろしていた。

「で？新ちゃんはどうしたいの？」

夕食の後、新八がぼんやり縁側に座っている時だった。お妙が不意に尋ねてきた。

「えっ？どうしたいって言われても どうせ銀さんは何も言ってくれないだろうし、神楽ちゃんも何だか冷めてるし…僕にどうにか出来る状況じゃない今、どうしようも」

新八は半ば諦めかけていた。銀時の考えも解らず、神楽の協力も得られず、何より攘夷戦争で敵味方関係なく恐れられていた剣豪と、世界最強と謳われる戦闘種族の居る万事屋の中では、自分は全くと言って良いほど強くないただのボロ道場の息子。何の業もない単なる一般人、か弱い人間だ そんな自分に何か出来るとは到底思えない。そんな暗い感情が、新八の中で渦巻いていた。だが、姉は弟の悩ましげな想いを感じ取っていたのだろう。お妙は優しく微笑んで言った。

「銀さんに付いていく そう言ったのは誰だったかしら？」

「姉上」

「神楽ちゃんだって本当は新ちゃんと同じで、銀さんに付いて行きたいんでしょ？」

お妙が言えば、神楽の肩はビクリと震えた。

「そつ、そんなことないアル！あんなチャランポランがどこで何しようと私には関係ないネ！」

「じゃあ、その手に持った傘は何かしら？」

お妙の指摘に神楽は慌てて傘を後ろ手に隠した。

「神楽ちゃん」

神楽は眉間に皺を寄せながら唇を噛み締めた。

「銀ちゃんはいつもそうアル。どーでも良いことばかり私達に押し付けるだけ押し付けて、肝心なことは何にも教えてくれない。私達を傷つけないように全部自分一人で抱えて、自分一人で背負つて、そうして自分一人だけが傷ついて…それなのにあのアホ、自分のことは全部ほったらかし、傷つくだけ傷ついて、その後は何もしないネ。ただ、傷ついたこと私達に知られないように、その傷をまた背負い込んでアル。そんなこと繰り返してたら、いつか銀ちゃん倒れてしまうヨ！だから、私がそれを止めさせるアル。私も、一緒に背負うネ。銀ちゃんに付いてくって決めた時から覚悟は出来るアル！」

「神楽ちゃん、“私”じゃないよ。」

新八がスツと立ち上がる。もうその眼に迷いはない。

「“私達”だ。僕も行く。あの腐れ天パ、一発ぶん殴ってやらなくちゃ！」

「お前みたいなダメガネに銀ちゃんは殴れないネ。逆に殴られるの

がオチアル。」

「えええええ!？」

そんな二人のやり取りを見て、お妙はクスリと笑った。

**第三十訓 家政婦エツロの本当の役名はアキロ(前書き)**

後書きまで話が続きます

### 第三十訓 家政婦エツコの本名の役名はアキコ

夜も更けた頃、志村家から出た新八と神楽は万事屋の前まで来ていた。

「かなり遅くなっちゃったアルな。あれもこれも全部 新八イ！お前のせいネ！」

「いや、神楽ちゃんが僕のこと無意味に殴りまくったからだろ！？」

階段を上がりながらギャンギャンと言いつつ二人は、やがて玄関の前に着いた。だが、扉越しに見る部屋は暗く、人の居る気配はない。

「あれ？明かりがついてない」

「鍵も閉まってるアル。」

ガチャリと鍵を開けて二人と一頭は中へと入った。

「銀さん？銀さーん？」

「風呂にも便所にもいないアル。」

「寝室にも居ない。どこ行っちゃったのかな？つまさか、僕ら既に置いてきぼりにされてるんじゃない」

「何だとオオオ！？こうしちゃいられないネ！！新八、早く銀ちゃんを探し出してぶん殴るアル！！あの白髪頭アアア！！」

「見つけたらタダじゃおかねエエエ!!」

いきり立った二人が、玄関へ向かったその時だった。

ガラガラガラ

「んあ　？あんだよ、てめーら帰って来てたのかア　ヒック！」

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

扉を開けて入って来たのは、今まさに新八と神楽が殴りに行くところ  
していた人物だった。顔を真っ赤にほてらせた銀時は、どこか覚束  
ない足取りでブーツを脱ぎ捨てる。

「銀さんアンタ、明らか酔ってますよね!？」

「新八君ては何言っちゃってんのオ？銀さん別に酔ってなんか  
ないから！ただちよっと頭がフワフワして気持ち悪くて今にも吐きそう  
なだけだかおぼろろろ!!」

「ギヤアアア!!もはや吐きそうどころか吐いちゃってるんですけ  
どオオオ!!完全に出来上がっちゃってるよこの人!!完熟だよこ  
れエエエ!!」

「完熟通り越して腐りかけてるアル。」

床にゲロをぶちまける銀時に、神楽が呆れた視線を向けた。銀時は  
口元をぐいっと拭きながら不敵に笑った。

「男つてのはよオ、酒飲む時は腐るくらいが丁度良いんだぜ？うぶっ！」

「あーはいはい、それ以上吐かれるとますます掃除するの大変なんですから。神楽ちゃん、銀さん運ぶの手伝って。」

「チツ！面倒臭いアルな。」

寢室に銀時を運び込んだ後、新八と神楽はソファーに座ってお茶を啜った。

「全く、銀さん今日は一体何軒ハシゴして来たんだらう？ツケないでちゃんと払ってれば良いんだけど。」

「大丈夫ネ。ツケは全部ヅラに回せば良いアル。」

「ええええ！？それって良いの！？」

「どーせ一緒に行ったに違いないアル。だからノープロブレムネ。」

「何ちよつとカッコよく言ってみてんの！？全然カッコいいこと言っていないから！むしろ卑怯だから！まあでも、良かったよね。」

「何がアルか？」

神楽が問えば、新八は銀時の寝ている部屋の襖を見ながら言った。

「銀さんだよ。僕、正直言って万事屋の電気が消えてるのを見た時からすごく焦ってたんだ。何でかはわからない。けど、前にもあつ

た、銀さんがもう戻って来ないって感覚に襲われて。」

「私も。」

「え？」

「私もそうだったネ。だから銀ちゃんが酔っ払ってたけど帰って来た時、すごく嬉しかったアル！」

本当に嬉しそうに笑う神楽につられて、新八も笑顔になった。

「僕ら、少し気を張りすぎてたのかもしれないね。でも、結果オーライだから良いか。明日も朝早いし、もうそろそろ寝ようか、神楽ちゃん。姉上が今日は万事屋に泊まられて言ってくれたから、僕も今日はここで寝るよ。」

「えー…別に帰れば良くね？」

「本気で嫌そうな顔しないでくれる！？今までの良い雰囲気台なしだよー！」

あまりに安心しきっていたせいだろう。酔っ払って眠り込んだはずの銀時が、今の会話を黙って聞いていたことに、新八と神楽は気づいていなかった。

### 第三十訓 家政婦エツコの本名の役名はアキコ（後書き）

規則的な寝息が、ソファアの上でする。話に花を咲かせている内に、二人とも寝入ってしまったらしい。

カタリ

小さな音と共に、襖が開く。しかし、二人が起きることはなかった。部屋から出た銀時は、新八と神楽の寝顔を無言で見つめる。その表情はいつになく優しく、そしてどこか哀しげだった。

「悪いな。でも…これで良いんだ。」

小さく呟くと、音を立てないように押し入れを開け、出した布団を二人にかけた。数秒ほど名残惜しげに新八達の顔を見つめると、銀時は玄関に向かった。もう先程までの柔らかい表情はない。口を一文字に結び、眉間に皺を寄せ、ギラリとした鋭い眼光を持った一人の侍の姿がそこにはあった。靴に足を入れると、銀時は腰にある二本の刀に触れた。そして、一度だけ万事屋の室内を振り返る。

「さよならだ…新八、神楽。」

再び前を向いた銀色の侍は、静かに、まるでその存在を消すように闇夜の広がる街へと出て行った。

### 第三十一訓 アニオタとジャニオタは馴れ合えない

朝、窓から差し込んだ光の眩しさに、新八は目を覚ました。

「ん、朝か…あれ？あ、そつか…僕、神楽ちゃんと喋っててそのまま寝ちゃったんだ。じゃあ、この布団は神楽ちゃんがかけてくれたのかな？まあ、とりあえず起こすか 神楽ちゃん、神楽ちゃん！もう朝だよ！」

「うー…新八い？何でお前が私の隣に居るアルか？」

まだ頭が覚醒しきつてないのだろう、神楽は薄く目を開いて、眠そうに擦りながら新八を不思議そうに見ながら言った。

「僕達、喋ってる間に寝ちゃったんだよ。ていうかこの布団、神楽ちゃんがかけてくれたんじゃないの？」

「布団？」

新八の言葉を聞いて初めてその存在に気づいたらしい。神楽は自分にかかっていた布団の端をつまみ上げながら首を傾げた。

「こんなモン知らないアル。それに私だったらお前みたいなダメガネなんかには布団はやらないネ！私で一人占めするアル！」

「酷くね！？ていうかメガネ関係ないし！！風邪引くかもとか、そういう心配少しはしてくれても良いんじゃないの！？でも、神楽ちゃんでもないってことは銀さん？あ、そういえば銀さんは？」

「あの万年ぐーたら男のことネ！まだ寝てるに違いないアル！」

「昨日もあんなに酔っ払ってたしね。ちょっと起こしてくるよ。」

「銀さん、もう朝ですよー。二日酔いって言い訳は通用しませんからねー。」

ガラッ

「それは間違いなく自業自得 って、あれ？」

「何アルか？」

新八の頓狂な声に反応した神楽が振り返ると、銀時が酔い潰れて眠っていた部屋には誰も居なかった。布団は綺麗に畳まれており、まさにぬけの殻といったところだ。

「あの天パ、朝から出かけ…ッ新八！？どこ行くアルか！？」

神楽の呼ぶ声を無視して、新八は万事屋を飛び出していった。

ドドドドドドドド！！

ガラッ！！

階段を駆け降りた新八は、万事屋のすぐ下、『スナックお登勢』の扉を勢いよく開けた。いきなり駆け込んで来た新八を、お登勢は怪訝そうに眉をひそめながら見た。

「何だい？こんな朝っぱらから騒々しい。」

「銀さん！銀さん知りませんか！？」

「銀時イ？コンビニにジャンプでも買いに行ってるんじゃないのかい？」

「今日は火曜日です！月曜でも土曜でもありません！ジャンプの発売日なら僕が起こさなくても勝手に起きて出かけたりするんですけど、コンビニに行く時はいつも乗ってくはずの原チャリも置いてあるし！それに」

一度言葉を切った新八の顔は、酷く歪んで泣き出しそうにも見えた。

「それに、胸騒ぎがして仕方ないんです。まるで銀さんが僕らの前から消えてしまつみたいいな嫌な胸騒ぎが…おかしなこと言ってるのはわかってます！でもっ…！」

お登勢はぐつと唇を噛み締める新八をじつと見つめていたが、やがて煙草に火をつけながら呟いた。

「全く、昔からバカだとは思っていたけどねエ。そこまで究極のバカだとは思っちゃいなかったよ。」

「え？」

「来たよ、アイツなら。夜中に一度。」

「ほ、ホントですか！？」

「ああ。もう店を閉めようとした時だったよ。」

深夜、スナックお登勢。

「たま、カウンターを拭いたら今日はもう終わって良いよ。」

「はい、お登勢様。」

お登勢の呼びかけに機械家政婦のたまが頷く。お登勢はたまに微笑みかけると、暖簾を外しに外へ出ようとした。その時だった。人影が映り、扉がゆっくりと開けられる。そこには銀時が立っていた。普段と様子が違うことに気づいたお登勢は、銀時が口を開く前に招き入れた。

「間の悪い男だねエ。今ちようど店閉めるところだったんだよ。まあ良いさ。何だか知らないけど、入りな。」

銀時は中へ入ると、分厚い茶封筒をカウンターの上に置いた。お登勢は中身を確認した後少し驚いた表情で銀時を見た。

「どついう風の吹きまわしかねエ。こんな一気に、ずいぶん珍しいじゃないのぞ。」

「向こう三ヶ月分の家賃だ。この前、超金持ちの依頼受けた時にたんまり貰ったんでね。無くなる前に先に払っちまおうと思って持ってきただけだ。」

「あたしゃ五ヶ月前からずっと家賃を貰った覚えはないんだけどねエ。」

「うるせーな。良いじゃねーか、たったの一月分くらい。女が深追

いするモンじゃねーよ？そついうのはさ、ホントに。」

「勝手に四ヶ月分も減らしてんじゃねーよ！！！」

「ったく、しつkeerな！しつこい女は嫌われんぞ！アンタみたいにババアになっちまった女は特にな！」

「あんだとコノヤロー！！あんまり癪に障るようなこと言つと半年間家賃倍にすんぞ！！！」

お登勢の剣幕に銀時は若干引いたが、半ば無理矢理に話を終わらせた。

「まあまあまあ、とにかくだ！少ないにしる家賃は払ったわけだから。もうここに用はねーよ。じゃあな。」

「待ちな。」

お登勢の言葉で、立ち去ろうとした銀時はぴたりと足を止める。

「アンタ、これから一体どこに行くつもりだい？」

「…何の話だ。」

「こんな夜更けに家賃の前払い、そして木刀と刀を腰に挿して出歩いている点などから、銀時様がどこかに出かけようとしていることは猿でも理解できるほど明白です。」

とぼけようとする銀時にたまがすかさず言った。

「たまにも言われちまうなぎ、アンタ本当に隠し事が下手くそだねエ。」

「ケツ！可愛くねー家政婦だぜ。祭の招待券貰ったから、ちょいと冷やかしに行つてくるだけだ。」

「へえ、祭に招待かい。アンタも随分と良い御身分になつたじゃないのさ。」

「バカ言つてんじゃねーよ。女子供禁制、ジーさんバーさん禁制の祭なんざに招待されたつて、何にも楽しかねーっつーの。ろくに酒も飲めやしねエ」

銀時はさりげなく、だがはっきりと告げた。

“来るな”と

「アンタは最近飲み過ぎだからね。ちよつと良い休息になつて良かったじゃないか。」

銀時には何かしらの思惑があるのだろう。お登勢はこれ以上の追及を止めることにした。

「酒飲むのに休憩も糞もねーよ。そろそろ行かねーとヤベーな。じや、よろしく頼むわ。」

「銀時。」

「あ？何だよ、まだ何かあんのか？」

踵を返そうとした銀時を、お登勢は呼び止めた。

「戻って来たら、残りの家賃しっかり払ってもらってからね。」

「……………」

銀時は何も言わずに今度こそ出て行った。

### 第三十二訓 息子が彼女を家に連れて来た時はとりあえず息子を殴っつけ

お登勢の話を聞いた新八は、内心怒りがたぎっていた。拳を固めて何も無いところをただただ睨みつける。お登勢はため息混じりに言った。

「アンタらが黙ってないのはアイツもわかってたはずだがねエ…それでも姿消したってことは、それだけ切羽詰まってるってことじゃないのかい？」

「だからこそ許せないんです!!」

新八は怒りのあまり、声を荒げた。

「銀さんは何もわかってない!!どんなに深手を負おうが、どんなに窮地に追い込まれようが、僕らのこと いや、僕らだけじゃない…背負うと決めた色んなもの全部護ろうとして、自分を擦り減らせてまで立ち続けちゃうんだ…。僕達はそんなこと望んでないのにッ！」

顔を歪めた新八は、苦しげに息を詰まらせた。しかし、自虐的な行動を取る銀時が、やはり許せなかった。

そんな新八にお登勢が言葉をかけようと口を開きかけた時だった。

「新八、バアさん、今の話はマジアルか？」

「！神楽ちゃん！」

「その話はマジアルか？」

再度尋ねてきた神楽の目の輝きは、新八と同じように揺れていた。

「あたしゃアイツの肩を持つ理由なんざないからね。嘘つく理由もないよ。」

「だったらすぐに銀ちゃん捜しに行くアル！今放つといたら、あのモジャモジャ何しかすかわからないネ！」

「僕、木刀持つてくる！！」

「ちよいと待ちな！」

いきり立っていた二人は、お登勢の声にびくりとして動きを止めた。

「アンタ達、勇んでるのは良いけど、それでどうするつもりだい？」

「どうするって決まってるじゃないですか！」

「さつきから銀ちゃん捜すって言ってんだヨ！バアさんが止めたって私達は行くからな！」

その言葉を聞いたお登勢は呆れたように顔をしかめた。

「だから私にアンタ達を止める義理がどこにあるのさ？私が言いたいの、アイツの居場所わからないのに武器だけ持ったって仕方ないじゃないかってことだよ！」

「「あ」「」

重大なことを忘れていた新八達は、一気に肩を落とした。

「そつだよ 僕達、銀さんがどこで何しようとしてるのか全然わからないんだ……」

「いきなり八方塞がりネ……」

「そつ落ち込むんじゃないよ。これを見な。」

そう言つてお登勢はテレビのスイッチを入れた。画面に映し出されたのは昼の定番番組『THE EDO』だった。司会の草野仁義が緊迫した面持ちで口を開く。

『えー、先程からお伝えしておりますが、警察庁長官宛てに届いた江戸で大火災を引き起こすとの犯行声明文書の内容が、更に明らかとなりました。』

「ああつ！」

「これ、桂さんが言つてた！」

それを聞いた新八達は画面に釘付けになつたが、次の瞬間には驚きのあまり身体が動かなくなつた。

『情報の発信元が不明なため、定かではありませんが、怪文書を送つてきた犯人は“白夜叉”と“狂乱の貴公子”を差し出せと要求しているとのことです。』

「「!!!」」

瞬きすらしない二人を一瞥して、お登勢はテレビのスイッチを押す。途端に草野の声も聞こえなくなり、店内には静寂が広がる。

「銀さん達は、江戸を護るために…」

やっと口からついて出た言葉は震えるように掠れていた。お登勢は何も言わない。だが、それが事実の肯定であろうことは聞かずともわかった。

「銀時様は」

声のした方に顔を向ければ、モップを持ったたまが神妙な面持ちで立っていた。

「例え秤にかけられたものがどんな大きさでも、眉一つ動かさず、唇一つ噛み締めず、ただ救い取ろうとする。そういう信念を持った侍だと私の中のデータには いえ、データなど関係ありません。皆さんの中の銀時様は一樣にそうであるはずですよ。」

たまの言葉で、銀時が背負わされてしまったものの大きさを知り、新八は何も言葉が出ずに押し黙る他なかった。しかし、神楽は眉間に皺を寄せて叫んだ。

「私だって一緒に背負いたいネ!!」

「神楽ちゃん」

「どんなに近くに居たって、いつになっても私、銀ちゃんの後ろにしか立てなくて 隣歩いててもいつも銀ちゃんの背中しか見えなかったアル。だけど私、もう銀ちゃんが私達守るために傷つくのを

指くわえて見てるだけなんて　そんなの絶対嫌アル!!」

肩を震わせて、神楽は涙を流しながら悲痛に言った。

「吉原だよ。」

「!」

「お登勢さん!」

「確証がある訳じゃないさ。だが、私の知り合いにかなりの情報屋がいてね。ソイツが今朝方ウチへ来て言ったのさ。吉原の方へ腰に刀を二本挿した、白髪の男が入って行ったってね。ただし、今居る可能性は低いよ。それでも良いってんならさっさと行きな。」

「どうする? 神楽ちゃん。」

お登勢の言葉を聞いて、新八は神楽を見た。神楽はぐいっと腕で力強く涙を拭くと、新八を見返して言った。

「最初から決まってるアル!」

「アンタ達。」

「何ですか?」

「んだヨオ、まだ何かあんのかヨ!??」

早く行かせると顔に書かれた二人を、お登勢はフンと鼻で笑って言った。

「行くからにはちゃんとあのバカ引きずって帰って来るんだよ。こつちも借金踏み倒されちゃ、迷惑なんでねエ。」

はつとなつた二人は笑顔になつて頷くと、それぞれの武器を手に駆け出していった。

新八達が出て行き、静かになつた店内。何事も無かつたかのように煙草に火をつけたお登勢に、横から呆れたような声がかつた。

「良カツタンデスカ？コレデ。アホノ坂田サンハアイツラガ来ルノ、望ンデナカツタノニ。」

「キヤサリン様、いらつしやつたのですね。今まで名前が一度出ていただけだったので、てつきり今回は登場しないものだとばかり思つていました。」

「ウルセーンドダヨ！！機械家政婦ノ分際デベラベラベラ喋リヤガツテ！！おかげで出番減つちまつたじゃねーかよ、つたく！！」

「キヤサリン様、口調が戻つていらつしやいますが」

たまの指摘にヤベツと口を塞ぐキヤサリンを尻目に、お登勢は煙を吐き出しながら口を開いた。

「良いのさ、これで。例えアイツらが銀時を連れて帰れなくても、銀時に自分をもつと理解させることは出来るかもしれないからね。」

空気に溶けてゆく紫煙を見遣りながら、お登勢は胸の内で呟いた。

(銀時、アイツらが行く前に死ぬんじゃないよ 絶対にね…)



第三十三訓 叱咤ニモ負ケズ罵倒ニモ負ケズ

「ふむ これが吉原。しかし、話に聞いていた所とは随分違うな。ゆうかくとかいうのがあるんじゃないか。あつ、まさか！アイツら俺がこういとまるで変わらんではないか。あつ、まさか！アイツら俺がこういうのに精通してないのを良いことに嘘を！くそっ！もっと勉強しておくべきだった！騙される前に知っておく あのパカな幕府の犬共が作った標語も時には役に立つものだな」

ガツツ！

「あだつ！ツ銀時貴様！今、本気で殴つただろう！？」

「その標語は老人向けだバカが！てめーはさつきから何の話をしてんだよ！つーか今まで自称堅物キヤラだった奴がこんなのに精通してたらマジでグダグダだろーが！もう何キヤラなのかわかんねーよ！まさかナニか！？ナニキヤラなのか！？」

(コイツらホントに何しに来たんじゃ！？)

銀時と桂が激しく争う横で、月詠はただただ呆れ返つて額を押さえた。

かつて銀時達の手によって二度救われた地下都市、吉原。遊郭の立ち並ぶ花街として名を馳せていたこの街も、子供達に自慢出来るような街にしていこうと、現在では遊郭を無くしてソープやキヤバラなどのかぶき町でもお馴染みの店が軒を連ねている。

そう、銀時は桂と共にその吉原に来て今の状況に至っているのだが話はおよそ四時間前に遡る。地上の街を通り抜けた銀時は、半ばイ

ラつきながら地下へと潜り込んだ。そう、桂が落ち合う場所として指定したのがなぜかこの吉原だったのだ。

「あら、吉原の救世主様じゃないの！どうしたの？そんな険しい顔しちゃって！」

「救世主様あ、疲れてるんなら寄ってかなあい？」

銀時は自分を呼ぶ声に一瞥だけで反応して、ただひたすら桂の姿を探した。

「まったくツラの奴、何でよりもよってこんな場所にすんだよ。ただでさえ春雨の息がかかってるっつーのに目付けられてる俺達がうるついたら目立ってしゃーねーだろーが」

「あら、銀さんじゃないか！」

悪態通りを歩いていると、後ろから明るい声が響いた。銀時が振り返ると、整った顔の女が太陽のような笑顔で車椅子に座っていた。それを見た銀時の顔も自然と綻ぶ。

「久しぶりだな、日輪。」

彼女は、かつて吉原の太陽と称され、かの夜兔族の二大勢力が一、夜王鳳仙に囚われていた花魁だった。その頃から今もずっと、遊女達の憧れの的なのだ。

「今日はどうしたんだい？月詠は今、晴太と一緒に見回りしてるから居ないんだけど。」

「いや、ちよいと連れを探しに来ただけなんだけだよ。」

「連れ？じゃあ銀さんにもとうとうコレが出来ちゃったのかい。月詠が悲しむね。」

「いや、男だ男。つーかそもそも女だらけの場所に女連れて来てどーすんだよ。」

「だってアンタ連れて来たじゃないか、一人。」

「神楽か？ありや女じゃねーよ。ただのマスコットだ。」

「マスコットでも、やっぱりあの子達が大事なんだね。」

その言葉に、銀時の肩が微かに揺れる。日輪はそれを見逃さなかった。

「初めてここに来た時には木刀しか持ってなかったアンタが、今日は腰に真剣そんなのを挿して来てる。それに」

悪戯っぽく微笑むと、日輪は銀時の顔を指差した。

「あの子達の話し始めてから、ずっと眉間に皺が寄りっぱなしだよ。」

「やっぱ敵わねーみてーだな、アンタには。流石吉原のお日さんってところか？」

銀時は 自分でも気付かぬ内に全身に入っていた力を抜いた。事態の大きさを察したらしい日輪は、先程までの明るい笑みを引っ込め

て、真面目な表情になった。日輪が言わんとしていることを悟った銀時も浮かべた苦笑いを消した。

「地上うへで何かあるんだね？地下こちには噂程度にしか流れてこないけれど…」

「てめーらがわざわざ巻き込まれる必要ねえよ。せつかく鎖から解かれたんだ。手なんざ出されてケガでもされたら、散々死ぬ思いで戦った意味もなくなっちまうしな。こっちはこっちで片ア付ける。だから噂は噂のまま流してくれや。」

「銀さん」

「連れ見つけたらすぐこっから出るわ。吉原じゃ救世主なんつー大層な呼び名で呼ばれてるが、春雨にとっちやとんだ疫病神だしな、俺ア。じゃーな。」

「また！」

立ち去ろうとする銀時の姿が、何故か消えてしまいそつに思えて、日輪は声を掛けずにはいられなかった。

「また、来ておくれよ？私達皆、いつも救世主様達が来るの楽しみにしてるんだからね。」

「フン、どんなに誉めたって金なんかやらねーぞ。拾う金はあるが、落とす金は無エよ。」

日輪の心持ちをわかっているのだろう。銀時は普段通りに言葉を返したが、決して面を向けることはしなかった。

「敵わないのはこっちだよ、銀さん。アンタ、私達にもあの子達にもそうやってわざと冷たく突き放すような真似して一人で全部持って行っちゃうんだね。だからこそ……」

人混みに紛れて見えなくなった銀時の背を未だに見つめている日輪の、切なげに漏れた呟きは、空気に溶け込んでいった。

### 第三十四訓 夏休みなんてあつてないようなモンだ

日輪と別れておよそ三時間後。銀時は未だ桂を見つけることが出来ずにいた。

「どこに居やがんだあのクソロン毛エエエ!!!」

ドッゴオオオン!!!!!!

桂に対して苛立ちを通り越して殺意すら芽生えさせていた銀時は、それを隠そうともせず丁度傍らに軒を連ねていた店の壁を容赦ない蹴りを入れた。怒りも加わった銀時の脚力に一介のコンクリートが耐えられるはずもなく、壁には大きな穴が空いた。遊女や客達の悲鳴が辺りに響き、店の中から慌てて出てきた支配人らしき男が銀時に掴みかかってきた。

「ちよつとアンタ!!!ウチの店に何しちやつてくれてんの!?!これだけ壊して弁償しないなんてこと許さツヒ!?!」

支配人は文句を言い切れずに小さく悲鳴を上げた。銀時が支配人の襟首を逆に掴んだ挙げ句、爪先が地面かは浮くほど持ち上げたのだ。

「弁償だあ?ふざけたこと抜かしてんじゃねえよ。何されちゃったのは俺の方だぜ?これだけ探させといて居ねえなんてこと許されると思つてんのか?こつちはなア、どつかのバカみたいにウゼエ長髪野郎にバカみたいに長エ時間使わされてんだよ。時間は金じゃ買えねーんだよ。それとも何?弁償したら俺が無駄にした今までの尊い時間返してくれんのか?あ?」

殺気を放つ鋭い視線とドスのきいた声に、目茶苦茶な発言を跳ね返す勇氣は彼にはなかった。

「む、むむ無駄口叩いてすつ、すすすいませんでしたアアア！！！！」

「謝って済むなら警察は要らねエんだよ！！ただでさえ疲れてんにテメエのせいで益々体力削られたんだよ！！どいつもこいつも俺を過労死させる気か！？そんなに俺に死んで欲しいのかゴルア！！」

最早涙目の支配人を持ち上げる勢いで掴みかかっている銀時は、まるでカツアゲをする田舎のチンピラの如くだった。自らの危険を感じたからか、支配人は懸命に身を振りながら必死に叫んだ。

「あつ、貴方様のお探しになっっているそのロン毛かどうか分かりませんがさっきあっちの方で白い妙な生き物を連れた長い黒髪の男が変なラップを歌ってましたアアア！！だからどうか命だけはお助けを」

「それを早く言えやアアア！！！！」

ゴシヤアアア！！！！

支配人の命乞いは残念ながら無駄となり、彼の頭は店の壁にめり込んだ。銀時はそれに一瞥をくれることもなく、野次馬達を押し退け走り出した。そして大通りの突き当たりを曲がった時、問題の人物はギャラリーに囲まれながら気持ちよさそうに拍子に乗っていた。

「今ならやるしかね〜ZURRA！今ならやるしかね〜ZURRA！ジョーイがJOY！ジョーイが」

「ジヨオオオイイイ！！！！！！！」

「ぐっはあああ！！！！！！」

『がはあああ！！！！！！』

銀時の叫びと共に炸裂した飛び蹴りは、エリザベスをも巻き込んで桂の顔面にクリーンヒットした。口から血を吐き出しながら桂が銀時を睨んで抗議した。

「銀時貴様アア！！俺と共に剣を取るところか俺の大切な布教活動の邪魔ばかりしおって！！」

「てめーの布教なんぞ知るかアアア！！つーかそんな猿の糞みてーなラップで伝わる訳ねーだろ！！大体隠れて落ち合う場所でこんな目立つようなことするのがそもそも間違ってたんだよ！！」

「猿の糞とは何だ！！せめてノミの糞と言わんか！！」

「ますます価値下がってるウウウ！！！！！！」

「一体これは何の騒ぎじゃ！？」

聞き覚えのある声が出て、ギャラリーの間を割って入ってくる人影があった。吉原自警団『百華』の頭領、月詠である。

「銀時！貴様ここで何をしてる！？いくら吉原の救世主とて吉原の風紀を乱すならばわっちも黙って見過ごす訳にはいかぬ！」

「お前はどこの風紀委員長？俺ア別に何もしてねーよ。寧ろカツアゲされた気弱な転校生ぐらいの被害を被ったわ。このエセロン毛ラツパーからな！どうせ捕まえんならコイツにしるよ！」

「酷いわ銀時！！アタシと待ち合わせしたの忘れたの！？」

「黙れエエ！！キモいんだよ！！その言葉そっくりそのまま返すわ！！！」

「何か勘違いをしているようだがな、俺は決してお前と落ち合う手筈だったことを忘れていた訳ではない！探してもお前が居ないから待つついでにラップなんてやっちゃおうかなーなんて思って歌っている間に頭の隅に追いやられていただけだ！！！」

「それただの弁解じゃねーかアアア！！！！やっぱり忘れてやがったなテメエエエ！！！！！」

「あー」

今にも殴り合いに発展しそうだった二人を止めたのは、空気を読む余り口出しを出来ずにいた月詠だった。

「どうせ喧嘩をするなら、歩きながらにしたらどうだろうっ？」

そして、前話の冒頭へ戻る。

### 第三十五訓 色気より食い気

「銀時、ぬしらは一体どういう用事があってこんな所に来たんじゃ？桂殿は何というか、その、こうした場所には余り詳しくないようだし…」

わざわざ地下へ降りて来たにも関わらず、先程から店に入るでもなく、まるで子供の喧嘩レベルの言い争いをしながらただ歩いているだけの二人を不思議に思ったのだらう。月詠は思い切り眉をひそめて尋ねてきた。銀時は未だキレ気味に言った。

「そんな事ア寧ろこつちが聞きたいわ！大体何でこんな所が落ち合場所！？目立ちに来てるようなモンだろこんなの！」

「仕方ないだらう！そうしろと言ったのはアイツの方だ！俺の判断では断じてないぞ！」

「アイツ？」

「む？言つてなかったか？何が起きるかわからぬ今、俺達二人だけでは少々危険かと思つてな。助っ人として呼んでお！」

「アツハハハハ！そのお姉ちゃん、わしと一緒にお茶せんかア！？」

桂が言い終わらないうちに、聞き覚えのある笑い声が響いた。

「ノーサンキュー！」

「アハハハハ！江戸のお姉ちゃんは相変わらず冷たいのオ！」

「……。」

「ん？おお！金時にツラ！何しちよったが！？わしゃもう随分前に到着しとったき！まっこと待ちくたびれとったぜよ！アハハハハ！」

「ツラじゃない桂だ。すまん、坂本。待たせてしまった。」

ようやく自分に向けられた視線に気づいたらしいモジャモジャ頭にサングラスをかけた、長身のその男…坂本辰馬は、ブンブンと手を振りながらいつもの調子で言った。

「俺は銀時だアアア！！！」

「ぶふおお！！！」

銀時は本日二度目の跳び蹴りを辰馬に食らわせると、そのまま彼の首に巻かれた襟巻きを鷲掴みした。

「こないつまでも一人の名前すらろくに覚えられない奴のどこが助つ人！？危険回避どころか状況が悪化するような奴呼び出しやがって！！まだスイッチ呼んだ方が役に立つだろーが！！！」

「そこはボツスンじゃないのか？臍は良くないぞ、銀時。」

「アイツはスイッチと違っていざという時しか役に立たねエ。それにアニメじゃ俺とスイッチは声一緒だし、って、俺アそんな話してんじゃねーよ！！こいつじゃいざという時にも役に立つかわかんね

「よー!!」

より一層怒りが増した銀時の手を掴みながら、キレさせた張本人は呻きながら力なく笑う。

「アハ、アハハハ…きつ金時。てっ、手を離してくれんか？さつきから、息が」

「銀時、さすがによしなんし。そのままではその男、本当に死ぬぞ。」

「月詠殿の言う通りだぞ、銀時。それに坂本の実力はお前が一番わかってるはずだろう？」

月詠と桂に止められ、チツと舌打ちをしながら銀時は辰馬の首から手を離れた。それを見た桂は視線を辰馬に移して口を開いた。

「しかし、俺も疑問に思っていたのは事実だ。俺達が春雨と戦闘して目を付けられていることは、お前にも伝えたはずだが。」

「まさか遊女見たさにここ指定したんじゃないやろーな？」

「いや、本来吉原に来る男達の目的は遊女じゃ。わっちからしてみれば、ぬしの方が可笑的い。」

眉を寄せて月詠が銀時にツッコむ。辰馬は軽く笑いながら言った。

「いやあ、確かに吉原のお姉ちゃん達は綺麗じゃ。わしも思わずお茶に誘ってしまったきに。」

「テメエが女ナンパすんのはいつものことだろ。辰馬、お前一体何を狙ってんだよ？」

「灯台もと暗し”ぜよ。今この状況下では、ここ吉原がお前らにとつては一番安全じゃ。」

”灯台もと暗し”…その言葉に銀時ははっとなった。それは桂も同じだったようで、納得したように頷いた。

「敵の監視下に置かれた場所に身を隠そうなど、本来俺達攘夷志士でもそんな自殺行為はしない。だがこのような状況においてこれは、逆手を取って奴らを欺く最上級の方法になる！」

「ふーん 考え無しつつー訳じゃなかったんだな。」

銀時も若干関心したような色を目に宿した。辰馬は続けて言った。

「それもあるんじやが、吉原にしたことにはもう一つ目的があつての…。」

「は？」

「まだ何かあるのか？」

辰馬の言葉に、銀時と桂は顔を見合わせて首を傾げた。

### 第三十六訓 ツラがアレでも内面の美しい者を人は神と呼ぶ

ここは美女揃いで有名な吉原では珍しい、醜女揃いで有名な店、その名も「ブスっ娘クラブ」。銀時達は辰馬に連れられるまま、名前に恥じることなく見事にブスマみれとなっている店内に入った。

「オイ辰馬。てめー、こんなとこまで来て一体何する気だよ？」

「目的は何なんだ？少なくとも俺には皆目見当もつかん。」

「大丈夫じゃ、桂殿。坂本殿が何をしようとしているのかわつちにもわからぬ。」

三人が口々に言うのもお構いなしに、我が物顔で店内を通り過ぎた辰馬は、なんとホステス達の更衣室へと入っていった。銀時は辰馬の行動にドン引きした様子で顔をしかめた。滅多に表情を変えない月詠ですら、驚きの余り口を開いたまま固まっている。

「おつ、女子の着替えを覗くなど、何と破廉恥な！日本男子たる者、そのような不埒で淫らな行動は」

「ツラ、今更月詠に対抗して堅物キャラ気取ったって無駄だぜ？お前のその迷走しきったキャラは取り繕おうとしても取り繕いきれねーとこまで来てんだよ。もうボロボロなんだよ。流石の母ちゃんでもそんなデケエ穴は塞げねーよ。」

赤面して堅物を演じる桂に銀時がツッコむ。そして顎に手を添えながら再び辰馬が入った更衣室の方を見遣った。

「しかし、アイツもとうとう変態のタガが外れちまったのか？いくら美人に相手にされないからって、こんな嫁にもいけねエような荒みきったツラのメスブタ共に手エ出そうなんざ気が狂ったと思えねーな。俺ア真つ平御免被るね。」

銀時の言葉に、周りのホステス達がすぐさまブーイングする。

「何よ！鳥の巣みたいな頭してるくせに！」

「そんなこと言って、ホントはアンタだって婿に貰ってくれる相手なんて居ないんでしょ！！！」

「やだ！結婚してない女を仲間意識しちゃうなんて相当重傷よ！？」

「うるせえっ！！おっ、俺だつてなア！俺だつて……」

ホステス達に急所を突かれ、銀時は膝を抱えて蹲り、それきり何も言わなくなる。

「わつちには桂殿よりもお前の方が取り繕いようがないように見えるのだが。」

月詠がため息をついた丁度その時だった。更衣室のカーテンが勢いよく開かれ、辰馬が出てきた。

「おんしら何しちゅうがか？こっちはもう準備出来たき。早く入るぜよ。」

「えっ、準備？覗きじゃなくて？何だ、違うのか…あっ、やっぱりそうだよな！坂本、俺はお前を信じていたぞ！」

「今明らか覗きに行ってるって思ったよな？全然信じてなかったよな？」

辰馬に促されるまま銀時と桂は更衣室へと入った。

そして、数分後 …

「ヅラ子でエス」

「モジャ子だぜよ！」

「パー子でエス！じゃねーよ！！」

銀時もといパー子は、頭に付いていたツインテールの片方をブチッと取り、床に投げつけた。それを見た桂ならぬヅラ子は綺麗に赤く塗り上げられた口元に手を当てて驚く仕草をした。

「ちよつとやだパー子！そんなはしたない態度取るなんてダメじゃないの！」

「何なりきつてんだよてめーは！！つか、もう一つの目的ってコレ！？何このハンパないデジャヴ感！！」

パー子がシャウトすると、辰馬ではなくモジャ子が感心したように笑い声を上げた。

「アツハツハ！！よく気が付いたのう！流石はパー子じゃ！おんしの言う通り、これはジャンプコミックス銀魂第二十五〜二十六巻収録の“吉原炎上篇”参照せよ！」

「元ネタがわからない坊やは今すぐ本屋に急ぐのよオ！」

「わっちら百華の活躍も載せてあるぞ。」

「このくだり全部コミックスの宣伝！？つかヅラ！！いちいち横から口挟むんじゃないよエー！！しかもなりきることに走り過ぎてこっちでもキャラが迷走してやがる！月詠！！テメーも空気読みすぎて最早悪ノリになってんぞ！！だーっ！何で俺がこんなにツッコまなきゃなんねーんだ！新八ポジション確立しかけちまつてるし！」

パー子は頭を抱えてしゃがみ込んだ。それに構うことなくモジャ子は普段通りの大股で出口へと向かった。ヅラ子はその背中を見遣り問いかける。

「モジャ子、一体どこへ行くのだ？」

「決まっちゃおうが」

モジャ子は首だけ振り返ってから掛かっていたサングラスをくいと上げた。

「わしら攘夷志士、一世一代の戦争ケンカぜよ。」

それを聞いたヅラ子はフツと笑ってモジャ子に続く。パー子はため息を一つこぼして立ち上がった。

「俺は元・攘夷志士だっつもの。勝手に一緒にすんな。」

出ていく三人の後ろ姿を見つめながら空気の読める女、月詠は思わ

ず一言漏らした。

「女装さえしていなければキヌるのだから…」

### 第三十七訓 鼻のデカイ男はタマもデカイ

開かれた天井から太陽が燦然と輝いている。そんな吉原の空の元、神楽は傘の下からそれを睨むように見つめながら言った。

「もう昼になってしまったアルな それもこれも新八！お前のせいアル！」

膨れっ面になった神楽の言葉に、新八もむっとなって反論する。

「夜まで待とうとか言って寝入っちゃったのは神楽ちゃんだろ！？何で僕のせいにされなきゃならないんだよ！」

「お前がちゃんと私を起こしていればこんなことにはならなかったネ！銀ちゃんが居なくなったらどうしてくれんだこのダメガネエエエ！！！」

「ちゃんと起こしたのに起きなかったのは誰だと思ってげふうっ！！！」

新八の訴えは神楽の理不尽な蹴りによって遮られ、よろけた身体は向かいから歩いて来ていたらしい女性にぶつかった。

「あ、すいませ」

向き直り謝ろうとした新八は思わず言葉を止めた。ぶつかった相手はどこか変に思えたのだ。女物の着物を着ているが、その背丈は新八よりもかなり高く、顔を羽織で隠していた。それに、ぶつかった時にも違和感を感じた。あれは…

「あの」

新八が話しかけようと声を発した時、その人物はすでに人混みの中に消えていた。

一体、何だっただらろう？

「新ハイ！何してるネ？早く来ないと置いていくアルよ！」

はつとなつた新八が顔を上げると、数メートル先から神楽が手をぶんぶん振っていた。

「ああつ！もうあんなところに居るし、ちょっと、待ってよ！」

新八は急いで神楽を追いかけた。

「……」

「ん？どうした、銀時？」

羽織の隙間から目を覗かせて、通りの人混みを見つめたまま立ち止まっている銀時に、桂が声をかける。銀時は小さく息を吐いてから振り向いた。

「いや、なんでもねエ。」

「ならばさっさと向かっぞ。もうあまり時間は残されていないからな。」

「ああ。」

歩き出した銀時が、新八達の駆けていった方に再び目を遣ることはなかった。

二人が吉原へと足を踏み入れたのは、どうやら銀時達が去ったすぐ後だったらしい。タッチの差であったことを月詠に聞かされた神楽は、悔しげに壁を蹴った。新八も唇をぎゅっと噛みしめる。

「あの天パ、どれだけ僕らを置いていけば気が済むんだろう？」

「アンタ達だけじゃないさ。私らだって、あの人には置いてけぼりを喰らわされてばかりだよ。」

「日輪さん……」

車いすを押しながら、日輪は少し哀しげに微笑んだ。そして、吉原を照らす陽光を眩しげに見上げた。

「吉原（こゝ）を深い夜の闇から掬い上げてくれてから、たまにだけ顔を出してくれるようになって。他愛ない話をしたり、酒呑んで馬鹿みたいに騒いだり。だけど、いつも何処か壁を感じてた。あの人は私達を吉原の太陽だって言ったけれど、私達にとっては、日の光を取り戻してくれたアンタ達やあの人が太陽なのさ。感謝してもしきれないくらいのことをしてもらった。だから、私達もそれ以上の何かを返したい。あの人はきつと止めるだろうけど、嫌なんだよ。いつまでもあんな暗い顔を見るのは。私達みたいなちっぽけな太陽で、どうにかなるなんて思っちゃいけない。ただ、あの人が私達をそうだって言ってくれたから。だったら、ほんの少しでもいい。あの人を

覆つちまつてる闇を照らしたいんだよ。」

(同じなんだ、皆)

日輪の切実な言葉に、新八は思わずうつむいた。

彼がいつだって一人で行ってしまうのが哀しくて。後ろを追いかけるのではなくて、本当は隣を歩きたい。だが、非力な自分の手が進むあの背中に届くかどうか不安になる。そうして腕を伸ばすのを躊躇った時にはもう遅いのだ。彼を助けたいのに、何もやれないまま。結局は彼に助けられていて、隣に肩を並べることは出来なくて。

「でも、今度は絶対に掴まえるんだ。」

「おうネ！私達を連れて行かなかったこと、後悔させてやるアル！」  
柱に寄りかかり、意気込む二人を黙って見ていた月詠が、ふっと微笑んで小さく息を付いた。

「ならばお前らに、わたちらの想いを共に届けてもらおうとしよう。」

新八と神楽が振り向くと、月詠は笑みを消してこう言った。

「銀時を追う前に話しておきたいことがあるんじゃない。」

突然の張り詰めた空気に、二人も口をきゅっと結んだ。



### 第三十八訓 幼稚園とか小学校の記憶ってもう曖昧だよな

- 深夜。

「酒だ酒エー！ドクペリ持ってこおいイイ！今日は辰馬のおごりだからよオオ！遠慮なんざする必要ねエんだぜエー！」

「今日は酒の肴にこれからの日本について語り合おうじゃないかなあ、エリザベス！」

「あの、私エリザベスなんて名前じゃないんですけど…」

「アハハハハ！わしゃ快援隊のタイチヨーじゃき、金だけならいくらでもあるぜよー！」

「いやん！流石はタイチヨーさん！太っ腹なのねえ！」

女装さえしていなければキマっていたはずだった攘夷時代のカリスマ達は、単なる酔いどれのバカと化していた。

銀時と辰馬は酒瓶を両手にカウンターに乗り上げてドンチャン騒ぎ、桂は目の前のホステスをエリザベスと思い込んで日本の夜明けについて熱弁を振るっている。

月詠は店の壁に寄りかかって大きなため息をついた。

「あの体たらく共めが…もうわっちの手に負えんようじゃな。ここは放って帰るか。」

そう呟いてみたが、どうにも気になって帰ろうにも帰れない。特に銀時を見ていると、どうしても世話を焼いてしまう。

（何故だろう？もしかすると日輪が言っていた母性本能とかいうやつだろうか？いや、だがアレは晴太に対して抱くものだとも言っていたような…まっ、まさかわっちは自分でも気付かぬうちに、心のどこかで銀時のことを息子だと思っていたのか！？）

「かつ、頭！大変です！」

悶々と考えているうちに、彼女の中で話がどんどんと在らぬ方向に進みかけていた時だった。百華の部下の一人が息急き切って駆け込んで来た。ただならぬその様子に、月詠は眉を寄せた。

「そんなに慌てて、一体どうした？」

「襲撃です！百華の何人かが傷を負われました！しかもたった一人で！」

「なっ！」

部下の言葉に月詠は絶句した。元遊女達も含まれているとはいえ、百華は精鋭が集まった自警団なのだ。それがたった一人に手を出せない…！？内心で何かがざわつくのを必死に抑えながら、月詠は冷静を装って部下に尋ねた。

「襲撃の目的は？」

「ここに潜伏している銀髪の侍に会わせろ、と。頭、まさかそれって…」

部下が言い終える前に月詠はぱつと顔を上げて周囲を見回したが、

いつ酔いが覚めたのだろう。彼の姿は既に店から消えていた。急いで銀時の後を追おうとした月詠に、驚くほど冷静な制止の声がかかった。

「待たれよ、月詠殿。アイツの心配は無用だ。」

桂は平然と猪口に注いだ酒を煽りながら言った。

「桂殿！だが！」

「ツラの言う通りじゃ。奴の目的は金時じゃき。わしらがわざわざ介入する必要はどこにも無いぜよ。」

辰馬も慌てる素振り一つ見せないで言い放った。

二人に銀時を気遣う様子は全くなかった。月詠は彼らの意図を理解出来ずに店から出て行こうとした。だが

ジャカ

店の外に足先を出したところで、こめかみに拳銃を突き付けられた。月詠は思わず固まった。額から嫌な汗が一気に噴き出してくる。

(この男、一体いつ銃を懐から出した！？このわつちが動きを読めぬなど)

百華の頭領である月詠にいきなり銃口を向けた辰馬に、部下はクナイを投げようとした。

「止めなんし！お前が敵う相手じゃない！」

月詠の怒鳴り声に怯んだ部下は、渋々とクナイを下ろした。それを見ていた辰馬も、小さく息をついてから拳銃を収める。そして月詠に再び目を向けた。

「これでおんしも解ったじやろう。この程度の動作も見極められんようでは話にならん。わしらの喧嘩の相手は並大抵のチンピラ共とは違うぜよ。このままわしらに付いて来る気だったんじやろうが、諦めた方がええ。正直言うて、足手まといじやき。」

辰馬の口調は極めて穏やかだった。しかし、その顔からは先ほどまでのヘラツとした笑みは嘘のように消えていた。サングラス越しの射抜くような視線に、月詠は息を飲む。

ずっと銀時のことをただ者ではないと思っではいたが、類は友を呼ぶとはまさにこういったことを言い表すのか。

「…安心しなんし。わっちはそこまで理解を示せぬほど馬鹿ではありんせん。」

月詠の言葉に辰馬は目を細めると、一気に破顔した。

「お堅い話はもう止めじゃ！飲み直しといくかのう、ヅラ！」

「ヅラじゃない桂だ。だが、いつまでも重い空気のままではせつかくの酒も不味くなるからな。お、丁度銀時も帰って来たようだ。」

「おい、辰馬。何入り口塞いでんだよ？通行の邪魔なんだよ。どけ。」

店へ入って来た銀時は、見た目には特に目立つような傷こそなかったし、落ち着いた様子だったが、心なしかその表情がどこか陰って

いるように見えた。

月詠は何かしら声をかけたい衝動に駆られたが、いかんせん立ち入ることを禁じられた上に、足手まといとまで言われてしまったのだ。

(日輪。 。どうやらわっちらの入り込める隙はどこにもないようじゃ…)

悲しいような悔しいような、何とも言い表せない気持ちになり、若干この場に留まるのも躊躇われたが、酒を手にしても心あらずといった様子の銀時を見てしまえばどうしても出て行くことが出来なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0680/>

---

銀の刃が光る時

2011年12月28日00時55分発行